報告書

中高一貫校設立後の
生徒、保護者、学校関係者
の評価検証

２０２３年９月３０日

日本先進教育研究ラボ

【調査の目的】

1．大宮国際中等教育学校インタビュー

2．大宮国際中等教育学校の教育について

3．IB 国際バカロレアについて

4．在校生・保護者・先生のアンケート結果

5．大宮国際中等教育学校の課題と大学入試の総合型選抜

（調査目的）

今回は「中高一貫校設立後の生徒、保護者、学校関係者の評価検証」を実施する。

「具体策その 1」では、といった中高一貫教育を実現した自治体首長／担当部局といった行政の声、実現に向けて現場レベルで活動した教育関係者を中心に取材。実現までに何をなすべきか、何に注意を払うべきか、どのようなスケジュール・手順で進めたのか、その結果どのような影響があったか・・・など開設に向けた事例を深掘りしてきた。

また、「具体策その 2」では「教員の募集」「人材育成」「生徒の募集」、さらに「学校施設の整備」や「開設後の運営面での課題や留意点」・・・などについて、これまで取材してきた各方面、とくに教育現場の関係者の声を中心に取材をおこなった。

本調査「その 3」においては、既存の中高一貫校の視察を含めて、「生徒の声」「父兄の声」「教育関係者の声」など、設立による様々な効果や評価を探求する。

1．大宮国際中等教育学校インタビュー

第１章 大宮国際中等教育学校（MOIS）インタビュー

（本文中敬称略）

この章では中高一貫校設立後の生徒、保護者、学校関係者の評価検証の為、公立の中高一貫校である大宮国際中等教育学校にご協力いただきインタビューを行いました。

校長　関田 晃先生

――2019 年に大宮国際中等教育学校として設立されましたが、そのときの課題にはどのようなものがあったのでしょうか？

関田　本校は国際バカロレア（International Baccalaureate・IB）に基づいた教育を行うという趣旨で設立した学校です。ですから、IB をどう導入していけるのかということが最も大きな課題でした。

現在でも関東圏内の公立校としては、唯一の MYP（Middle Years Programme）・DP（Diploma Programme）校です。そのため、周りに手本はありませんでした。

設立準備をしているとき、IB を導入している学校には、国立では東京学芸大学附属国際中等教育学校（東京都練馬区）と、私立では玉川学園（東京都町田市）などがありましたが、その当時、公立で導入していたのは、札幌開成中等教育学校（北海道札幌市）だけでした。視察には私も複数回行きましたし、スタッフも札幌に派遣するなど、いろいろと見聞きをしながら、準備を進めました。

――現在の課題にはどんなものがありますか？

関田　１期生がいよいよ５年生になって、卒業後のことを具体的に考えるようになり、大学入試についての先行事例がないので、とても不安を感じていると思います。
加えて、本校はもともと高校に勤務経験のある教員が１割程度と極端に少ないのです。残りの９割は中学校から転勤をしてきたか、初めて教壇に立つ人間で構成されています。
そのため、そもそも大学の進学指導経験者がとても少ないことが現在の課題です。

――その課題は、どのように解決していかれるのでしょうか?

関田　これから１期生の三者面談が始まっていきますが、事前に２回の研修を行って臨む予定です。
特に進学指導の経験をしたことがない教員たちにお願いしているのは、大学への進学指導については、自分の感覚で言わないということです。本校のスタンスや取り組みへの質問には、答えられるものは答えていいけれど、そうでないものは後ほど回答するとして引き受けておくようにと伝えています。
１期生はどんな大学を考えたらいいのか、進路についても一から切り拓いていくわけです。

1．大宮国際中等教育学校インタビュー

開校前に実施した説明会で多かった質問が、指定校推薦はありますか?というもの。新設校ですから、推薦枠はあるわけがないのです。
――保護者の世代が高校生だったときと現在は、大学受験の状況がいろいろと違っています。とはいうものの、大学受験だったり、社会に出てからだったり、不安を感じる親御さんも多いと思います。

関田　しかも本校は、探究的な学習をかなり突き詰めてやっています。親御さんたちからしたら、自分たちのときにはありえないことをやっているので、これで本当に大学入試は大丈夫なのかと、不安に思われています。
でも親御さんが直近の大学入試問題をご覧になっているかというと、ほぼ見ている方はいません。だからなおのこと、心配なのでしょう。

――IB 校として、海外大学への進学指導はどうなっていますか？

関田　上記の通りですので、校内に海外大学進学指導経験者は一人もいません。そのため、外部委託をしたいと昨年度と今年度向けの予算要求をしましたが、委託費としての予算はつきませんでした。
ただし謝礼金レベルではある程度まとまった金額の予算がついたので、民間の予備校系の外部進学アドバイザーやコンサルタントとして長い経験を持つ方を講師に迎え、その都度謝金をお支払いをしながら、生徒向け、保護者向け、教員向けなどのさまざまなセミナーを開催していただいています。

――この学校が、市内の他の学校に与えている影響にはどんなものがあるとお考えですか？

関田　いくつかありますが、いちばん刺激を与えているといいますか、手本を示しているのは ICT の活用状況だと思います。
1 期生が入学した時点で、市の予算から 1 台 35 万円ほどするパソコンを 5 年リースし、生徒全員に貸与しています。
その時すでに国の GIGA スクール構想はありましたが、コロナ前だったのでまだそれほどは進んでいませんでした。ですから、本校はそれよりも一歩先んじて使い始めることができたということです。

本校の施設をご覧いただくとわかるように、全教室に電子黒板型のプロジェクターが付いていて、すべての教科の授業で使っており、生徒たちも慣れています。
本校生徒に対する市の教育委員会が実施したアンケートでは、日常的に ICT を使った活動をしていますかという質問項目の回答は 99%なんです。我々からすると、その 1%が残っている状況がありえないという思いですが、この数字は言うまでもなくダントツの高さです。

コロナになり、GIGA スクール構想が前倒しになって配備されました。さいたま市は、“伝道師”と呼ばれる「エバンジェリスト」を各校に置いて ICT を広めるなど独自性の強い取り組みをしていますが、その際に参考にしていただきました。

1．大宮国際中等教育学校インタビュー

日常的にICTを使った学習活動とはどういうものかは、本校の取り組みをご覧くだされば雰囲気や様子がわかるはずです。

――探究学習をする上で、ICT活用は必要不可欠ですものね。ICTの導入において、先生方の状況はどうでしたか？

関田　本校の設立時、全教員がICTを上手に使えるわけではありませんでした。ただし現在の副校長はもともと技術の教員なので彼をはじめ、ICTが得意だったり詳しかったりという者が何人もいました。

副校長が情報の免許を取得しつつ、準備段階からどんな機材を入れ、どういう活用をしていくかということも含めて、彼らが学校内のICTの仕組みを構築していきました。
準備をしていた12人の教員は、その段階から日常的にICTを使うトレーニングをしていましたから、その後は入ってくる教職員に伝える形で進めています。

――生徒たちはデジタルネイティブですから扱いにも慣れていると思いますが、ICTリテラシー教育はどうされていますか？

関田　情報という教科は高校にしかありません。ですから、技術・家庭科の分野として授業の中にCTリテラシーなどを取り入れています。そのほか、さまざまな教科で実際に使っていく中で、例えばレポートを書くときには必ず引用元を記すこと、インターネットなどから情報を取ってきた場合でも、さも自分の意見のように書いてはいけないといった、気をつけるべき要点を押さえながら授業を実施しています。それらは入学後の早い段階から取り組んでいます。

――探究でのまとめや発表する機会も多いと思うので、学びながら学んでいくような感じでしょうか。実際の授業風景というのは、どういう雰囲気なのですか?

関田　それは言葉ではとても説明ができません。ですので、本校に視察にいらっしゃる大抵の方には、まず授業をご覧いただいて、そのあとに私が説明することにしています。そうでないとご理解いただくのはなかなか難しいと思います。IBの取り組みについてもあわせて説明していますが、IB校として認定されるには高いハードルがあります。しかしその探究的な学習のスタイルをご覧いただくことはできます。

いつでも授業をご覧になってくださいと、市の教員向けの研修会や会議の会場として、本校のホールなどを課業日であっても積極的に貸し出しています。休憩時間には授業を見に行っていただけるように、市教委にお願いしています。そうでないと遠慮して授業まで見に行こうとされる方は少なかったので。最近は休憩時間を長めにとってもらい、ご覧いただけるようになってきています。

――公立学校として非常に人気があって、入試も熾烈を極めているかと思いますが、そのあたりに関して、関田先生のお考えをお聞かせください。

1．大宮国際中等教育学校インタビュー

関田　他の多くの教員がどう思っているかは掌握していませんが、私自身は本校志望者の大半が５年生、早い場合には４年生くらいから通塾をし、受検に備えてきているという現実は承知しています。

本校の適性検査問題は、過去問をすべて公開していますが、難問を解くとか中学で習うようなことを先取りして勉強しないと解けないものではなく、示されているデータから必要なものを読み取って、その場でいかに読み解いて答えられるかという問題ばかりです。
知らないと答えられないものは出さないということは問題作成の基本に据えていますので、例えば理科で顕微鏡の実験をするための手順を答えなさい、などという出題は絶対にありません。

漢字もその時点で未習のものには全部ルビを振るといったような配慮はしていますが、四則計算はできる前提としています。

学習塾の皆さんからは非常に対策を立てにくいと言われます。それはその通りですし、そうあるべきだと思っています。それでもやはり、塾には出題するテーマすら予測されてしまっているかもしれないと感じることがあり、本当に感心します。塾の説明会も呼ばれれば行きます。

――入学された生徒さんたちに対しては、通塾経験の調査などは実施していますか？

関田　現在通塾しているかどうかは聞いています。４割程度は塾に行っていますが、年々減ってきました。１期生が入ってきた時は、これは塾に通わなければ授業についていくのは無理と考えられていたのだと思います。塾に行くこと自体を否定はしませんが、塾には本校のようなスタイルの授業はできません。もしもそれが本当にできるのであれば、塾は本校一校のためだけの対策をやらなくてもよくなるでしょうし、こうした教育は普及していくと思います。しかしそれはやはり難しいでしょう。

ただし、例えば英文法や数学の基礎問題の反復練習といった基礎学習に当たるものが足りないと感じる場合、本当は生徒が自分自身でできればいちばんいいのですが、自分では難しいというお子さんもいるでしょうから、それを補うという部分では、通塾は意味があることなのかなと思っています。

これはいろいろなところで言っていることですし、そんなの無理だと言われてしまいそうなのですが、私が個人的に期待している入学生像というものがあります。それは、通塾経験のない児童で、学校から帰るとランドセルを置いて遊びに出かけるような子。かつ遊んでいる友達は毎日違って、今日はこの子と、今日はこっちのグループに誘われたから、今日はまだ今まで一緒に遊んだことのないこの子と遊んでみようと思って学校で声をかけたんだ、と日々多彩な友だちと触れ合っている子です。
こういう子が時折いるわけです。こんな子たちに本校へ来てほしいと切に願います。

それだけのコミュニケーション力を持っていれば、いろいろなネットワークが広がって知恵を集めることが当たり前になってきますし、困った時は誰かに相談できるでしょう。

入学してからでもいいので、そういったコミュニケーション力を身につけたり、多様性を知ったりしてもらえると、人間としての強みが出せていくと思います。

こうしたことをお伝えしていると、大学入試を考えてのことですかと？聞かれますが、それを考えたことはありません。
大学入試という直近の問題ではなく、そうしたコミュニケーション力というものは今後、当然求められていく力です。

でもそれが身についていない大学入学者が多く見受けられるので、国も国立大学協会も何とかしようとしているということですよね。今の三位一体の教育改革は、まさにそうした意図が見えます。しかし、変わりきれていないのが実情です。
現在のような大学入試制度を続けている限り、これらの力は育つわけがないと感じています。

日本の GDP は、いまはまだ３位をなんとかキープしていますが、それもこれからどうなってしまうのか。
いずれ日本ってどこの国だっけ？なんて聞かれてしまう日が来るかもしれません。
日本の存在感が薄れても、世界がより良くなっていくならばまだいいのですが、本来、日本が潜在的に持っている力を発揮するのであれば、発揮できるような力をつける教育を進めたほうがいいですよね。

――世界に通用できるような人を育てようとして、貴校の教育があるのでしょうか？

関田　そうですね。何しろ、それが市長のオファーでしたから。

――世界標準の MOIS（Municipal Omiya International Secondary School・モイス。大宮国際の英語表記の頭文字を取った愛称）の学びと旧体制の大学入試制度で求められることが合わなくなるという課題が出てしまっていますね。

関田　本当は令和７年度の新課程入試が１期生の卒業と同じタイミングで導入されるはずだったので、これはいけると思っていたら案の定といいますか、いろいろなところで頓挫していますよね。

――日本の大学入試制度と IB の評価軸の落差がいちばんの課題なのだと思います。それはそれとして、生徒さんたちが社会に出た時の活躍ぶりは期待できますね。

関田　そうあってもらいたいと思います。目の前の大学入試が予想していたほどには変わっていない現実について、これでは今までのような受験勉強をしなければと生徒たちは焦るかもしれません。しかし私たちはあくまで、学校の授業は変えないというスタンスです。

1．大宮国際中等教育学校インタビュー

――それにもタフに適応できるような力をさまざまな学習を通してつけているということでしょうか？

関田　生徒たちには「学校に頼るな」と伝えたいのです。卒業したら学校に頼ることはできませんから。

――日本の社会も世代交代を含めて、かなり大きく変容してきていますが、どんな社会で活躍をしてほしいとお考えですか？

関田　一例を挙げると、１期生が入学して１年経たないうちにコロナ禍になり、臨時休業になりました。その臨時休業中、彼らへ定期的にメッセージを発信していました。例えば「今はとても大変な時を迎えていて、世界中がどうしたらいいかわからない。けれどもこれはこれまでの感染症と同じで、必ず解決される。いつか乗り越えられる。リアルタイムで目の前で起こっていることなのだから、誰がいつどういうことをして乗り越えていったのかをよく見ておこう。そして、次のパンデミックが来たときには、あなた方がそれをやるんだよ」ということなどです。

先日のセメスター2 の始業式で、生徒と教職員に対してオンラインで話したのはこんなことです。
「今期の目標は秋休みに考えたと思う。けれどもその目標に加えてほしいことがあります。
例えば今朝の NHK ニュースのトピックでは、イスラエルとハマスの戦闘やウクライナ情勢など、国際問題に関わるものが５つありました。
日本の月曜日の朝のニュースの８分の５が、こういった世界各地の問題について報道されているのです」

セメスター2 では、自分の成績を振り返って勉強をもっと頑張らなければということだけでなく、そうした視点を持って生活をする大切さを伝えました。

結びとして「例えば 20 年後は 37 歳くらいになっている１期生、あるいは 50 年後に 62～3 歳になっている５期生のあなた方一人ひとりの力によって、その時の世界の一角が変わっている、ということを僕は期待している」と伝えました。
教室で聞いていた１期生たちから拍手が起こったそうです。本校はそうしたことを期待する学校ではあるものの、それが生徒たちにしっかりと伝わっていたと感じられるのはうれしいことですね。
なお学校 HP には、これまで私が話した内容が掲載されていますから、ご覧いただければと思います。
――彼らにはそれだけの自負があるということですね。

関田　そうだと思います。１期生たちはおそらく現在、大学入試について進路指導担当者からいろいろと言われて、悶々としている部分があったのだろうと思うのです。でも皆さんが目指しているのはそこではない。大学入試はあくまでステップ。ステップは踏み固めながら、20 年後、50 年後を見通すことが大切だよと伝えたいのです。

――人生 100 年時代の子どもたちですしね。高校受験がない分、できることがたくさん増えていると思いますが、その部分で特に感じている部分はありますか?

1．大宮国際中等教育学校インタビュー

関田　やはり途中で学びが途切れないことでしょうね。多くの場合、中３の半年間程度は高校受験のための振り返り学習を徹底しなくてはなりません。
中高一貫校はそこを意識しなくていいので、その時に取り組んでいる学習に没入できます。探究のスパイラルをずっと続けられるので、生徒たちの年々の成長ぶりを見られます。

――今回のアンケートで、生徒さんたちから中だるみについての意見が多数寄せられました。そのあたりについてはどうお考えになりますか?

関田　中だるみについては中高一貫校の強敵というか、本当に宿命的なところなのでしょう。
しかし、６年間ずっと緊張しっぱなしは無理です。そういう意味ではやむを得ないのかなと思います。

――そこはどのように促していますか?

関田　生徒たちに「たるみすぎていると大変なことになるよ」とは伝えています。本校は定期テストが無いので、常に何らかの課題を仕上げて提出するという学習のスパイラルがあります。ですから、試験が終わった解放感からの息抜きといった仕方はできにくいはずなんです。そういう意味では、常にある程度のストレスというか、緊張感を保っていられるといえます。
とは言っても中だるみがあるのはわかっていたので、セメスター1 の終業式で生徒たちに成績の振り返りについて伝えました。
それは、成績とは高い・低いということを見るものではなく、過去の自分を振り返って、成果と足りなかった部分を自覚し、現地点にいる今の自分を見つめ、未来に向けての計画を考えるためのものであるということ。教員たちにはその上で成績表を渡してもらいましたが、理解されているのかが難しい部分です。

――今までの成績表とは、考え方の概念が違うということですね。
神戸で公立中高一貫校を作ろうとした際、早くても５年から 10 年はかかるだろうという話になっています。先生がおっしゃる 20 年後、50 年後の在り方を考えるときに、10 年後に学校を作るとしたら、こういう学校を作りたいということはありますか。

関田　僕が今語ったことがほぼすべてです。つまり普遍的な部分です。今後、いろいろなスキルが重宝されるようになるでしょうが、目指しているのはどこなのかを明確にすることです。

例えば、東大進学は灘に任せておけばいいわけです。うちの学校に来るのはそうではなくて、東大に行きたい子はもちろんいてもいいけれど、高校を卒業したら大学に行かないで放浪の旅に出るような子がいてもいいんです。むしろそういう子が半数くらいはいてほしい。それで世界を見てきて、今自分に求められていることはなんだろうと、世界が何を必要としているのか、自分が成すべきことは何なのだという意識や志を持とうよと伝えたいのです。

1．大宮国際中等教育学校インタビュー

昔風で言うところの、どんなにいい大学に行って一流企業に入ったって、このままでは人類は滅亡します。これはいろいろとご意見があるでしょうけども、自然の節理に従って突き詰めていくと、もしかしたら人類は滅んでもいいのかもしれないという考えが出てきてもいいのですが……。しかしやはりできれば、自分自身はより良く生きたほうがいいですし、自分の周りの人たちが自分が何らかの働きをしたことによって少しでもハッピーになってくれたら、それはすごく幸せなことだと思うのです。
とても抽象的ではあるのですが、そうした思いや視野を世界というフィールドに対して広げていくことが、これからの子どもたちにやはり必要だという基本がぶれないことが大切なのだと思います。

そのためにこれからの時代に必要なものが出てくれば、その時にそれを取り入れればいいということでしょう。

――最後に、公立中高一貫校の魅力について教えてください。

関田　まず前期課程は授業料がかかりません。ただし、海外に行けば旅費はかかりますし、本校も受益者負担分はあります。それでも受益者負担以外は、非常に低廉な経費で学ぶことができます。
私立はどうしても採算を考えなければならない学校経営の中にあります。やはり多くを納めなければならないという部分に対して、公立はそのハードルが下げられます。

しかしながら、以前に神戸市議会の方に受けた、塾に行かなければ試験をパスできないということは家計の力が関わるというご指摘は、やはりその通りだと受け止めています。

そこは比較の問題というか、グラデーションというのか、これよりはいいよねという捉え方で、そういう意味での公立中高一貫校の意義は大きいと感じています。

社会科教諭　先生Ａ（男性）

――教諭としてのご経歴を教えてください。

先生Ａ　最初は、中学校の教員を合計６年間やり、そのあと人事交流等もあって高校に１年間異動し、そこでは高校１年生と３年生を教えていました。
その後、この学校ができるにあたってだと思うのですが、派遣で中高一貫校に１年間行きまして、高校でもう１年教えて、本校の設立準備時から関わっています。

――いろいろな形態の学校をご覧になっておられますが、MOIS の教育といわゆる普通の公立中学・高校との違いは？

1．大宮国際中等教育学校インタビュー

先生Ａ　言い方は難しいのですが、高校受験がないので中学校３年間で１周しなくていいという部分です。社会科は英語などと違って、一度学習した時代はもう中学３年間で二度と学びません。スパイラルしないのです。
中学の３年間だけの場合、そこで完結させなければなりませんが、この学校の場合は６年間を通して考えられます。６年生までで必ずもう一度、２周は履修できるというイメージを持つことができます。

中学でもし知識が定着しなかったとしてももう１周あるので、学ぶ方法や考える力（資料の調べ方やまとめる方法、プレゼンテーション力　等）といったコンピテンシーなどを含めた学ぶ力を育成しやすい環境があります。調べる能力や学ぶ能力を伸ばせるという部分で、知識を詰め込むだけではない箇所にフォーカスできるところが大きいと思います。
綺麗事になってしまうかもしれませんが、ある意味、学習指導要領で求められている「知識及び技能」や「思考力・判断力・表現力」といった学びをやろうとしているというのが、本校の特長なのだと思います。

もちろん既存の学校教育が悪いということではありませんが、やはり高校入試がない分、学びの本質を突き詰められるところが大きく異なります。

文科省の学習指導要領の目指すところというのは、そういう中で能力も知識も育つということです。
高校生はもちろん大学入試に向けた動きもありますが、本校はまだ５年目なので教育の成果が見えるのはこれからです。本当に目指す学びができたかということをどう検証していくのかは、今後の課題になっていくと思います。

――そういった教育というのが、生徒さんたちの受験ないし社会に出てから将来どのように役に立つとお考えになりますか？

先生Ａ　これはおそらく個々の教員であったり、あとは経験年次による考え方の違いもあったりすると思いますが、本校では大学に行くことがゴールではなく、あくまでもどういう人生を生きていきたいのかを突き詰めるところを基本理念に置いています。
かつての教え子でも例えば、いわゆるいい大学を出たんだけれども、結局就職が全然決まらない。あるいは大企業に就職をしてもうまくいかない。もしくはそういうルートに乗って成功しているように見えても何か心に虚しさを抱えているというような子がいます。要するに「幸せに生きる」ということにおいて、どういった能力が必要かということです。創立当初に話していたのは、本校を卒業したということがそのまま社会で通用するということになるような学校にしようということ。社会で活躍するというのは、その一歩前にあることなのかもしれませんが、本校を卒業してどこの大学に入学しましたということが価値なのではなくて、本校を卒業したということ自体が価値になるような６年間を過ごさせてあげられ、かつ能力をつけられると理想だと思っています。

――今、実際に生徒さんたちの成長ぶりをご覧になっていかがですか？

1．大宮国際中等教育学校インタビュー

先生Ａ　例えば外部とつながるですとか、いわゆる社会に出ていくという力は非常についてきていると感じます。
ただ、これは知識偏重の話になってしまいますし、裏表一体ではありますが、高校入試を経験していないことにより、社会科でいえばその３年間の知識を一度しっかりと定着させる機会が取りにくいという部分があります。
また高校受験経験がないというところが、もしかしたらいわゆる一般的な受験ルートを通ってきた子と比べると、ベタな言い方ではありますが気合と根性という面でどんな違いが出てくるのかということを見ていく必要があるかと思っています。
やはり最後は、根性も含めたバイタリティや生命力というものが結局大事になってくる時もあるので、そうした力を育てていく必要性は感じています。

――なお中高一貫校では、中だるみの問題が言われがちですが、そのあたりはどうお考えですか？

先生Ａ　個人的に中だるみはするものだと思いますし、していいのではないかと思います。逆に６年間張り詰めっぱなしというのは、なかなか難しいことです。
ただし高校に入ったところで、ここからは単位を取らなくてはいけないという指導が入るので、４年目で切り替わる部分も比較的あるでしょう。

ある意味、中高別の学校でも、中２や高２で中だるみは来るので、そのタイミングがそれぞれなだけなのかなとは感じます。

なお我々が抱えている大きな課題として、大学合格実績に軸足を置いているわけではないということを保護者や設立した教育委員会に向けて、いかに伝えていけるかということです。大学進学というのは本校が目指す教育の本質ではありません。
とは言うものの、総合型選抜等などで成果は出せるかもしれませんが、大学合格実績を出さなければいけないという、プレッシャーがあることも事実です。

また保護者の方に抱かれがちなのは、中１から入れればこれでもう安心。これでこのままエスカレーターに乗っていけば、いわゆるいい大学に入れるのねという考え方をされがちであることです。それは６年一貫の学校の弱さであり、難しい部分であると感じています。

体育科教諭　先生Ｂ（男性）

――教諭としてのご経歴を教えてください。

1．大宮国際中等教育学校インタビュー

先生Ｂ　最初に本採用されたのは、千葉県の高等学校です。その後、埼玉県の高等学校で採用になり、2010年開校の埼玉県立蓮田松韻高等学校の立ち上げに一から携わりました。5年経ったところで、今度は市のほうで本校を立ち上げると聞いて退職し、立ち上げのメンバーとして異動して現在に至っています。

――千葉と埼玉では、雰囲気は大きく違いますか?

先生Ｂ　そうですね。雰囲気は全然違います。さいたま市のほうが比較的、民主的で意見を聞いてくれる印象です。当時の千葉県は、いい意味で森田健作県知事ならではの熱さがありました。

――中学校での指導経験はありますか?

先生Ｂ　中学校は国体で採用され、3年間を姉ヶ崎（市原市）のほうで経験しています。
――それらのご経験の上で、MOISの教育というのは、先生が今まで関わってこられたものとの違いはいかがですか?

先生Ｂ　併設型の中高一貫校の場合、中学と高校の教員の間で、摩擦のようなものが起きると耳にします。それぞれが人の教え方に対して、自分との差異を感じて言い合いになることがあるようです。
私が体育科でいつも伝えているのが、1・2年生がティーチャー、3・4年生はコーチ、5・6年生はアドバイザーというように、システマチックに生徒への接し方を分けて考えることです。発達段階が異なるので、そもそもやり方が違うのです。
中学校の先生からしたら放置しているように見えるかもしれませんが、高校教諭からすれば教えすぎではと感じてしまうでしょう。しかし発達段階の違いを理解していただく工夫が必要だと思います。

――中高一貫校の運営を円滑にする上でのアドバイスはありますか。

先生Ｂ　併設型の学校では、場所の取り合いなどをたくさん見てきました。そのため大切なのは、職員室や教科室が分かれないようにすることです。学年の島というのはあってももちろんいいのですが、もともとあった高校に中学校を作った場合にそれらが分かれていることで、中高の先生同士に壁ができてしまったというケースを聞いたことがあります。
中高6年間を見通した教科教育として、本校はいま本当に仲良くやっていますし、空間や部屋の作り方を考え、教員同士でコミュニケーションを図れることが重要だと考えます。
中等教育学校を作るというのは、中高一緒の教科室など、とてもメリットがあると思います。

――MOISでは生徒の主体性をとても大事にされていますが、教師という職業はどうしても教えたがりの方が多い印象なので、その切り替えは難しい部分もあるのかなと感じます。

1．大宮国際中等教育学校インタビュー

先生Ｂ　最初のほうはアクティブティーチャーでもいいと思いますが、やはり徐々にアクティブスチューデントというほうに意識を持っていくようにしなければいけないと思います。それをシステマチックに捉えられていれば、お互いにストレスになることもありません。
また高校にいたときに感じていたのが、入学して半年程度で高校生活に慣れないうちに、高２からの文理選択に向けて、将来へとつながる専門科目を考えなければならないということ。これは生徒にとって大変なことです。中学も高校も経験した立場から見ると、長期的なスパンで将来を考えられることは中高一貫教育の大きな魅力であり、メリットだと思いました。

――今のお話につながると思いますが、生徒さんたちの将来だったり、未来だったりを考える上で、現実問題として乗り越えるべく受験はありますが、そこに関してはどのようにお考えですか。

先生Ｂ　先日、シンガポールの現地の中高一貫校を回らせていただきました。そこは世界的にも DP で高い進路実績を出している学校です。
探究学習を進める上で感じるのはやはり、基本的な知識が豊富でないと学びは深められないということ。その学校でも同じことを言っていて、あえて MYP の探究を取らずに独自のプログラムを作っていました。低学年のうちにある程度知識を詰め込んで、最後の３年間で探究に取り組み、全員に DP を取らせて進学させています。
シンガポールでは先に詰め込みをして最後に探究をするスタイルでしたが、本校の DP はこのままでいいと思うものの、本校は MYP をやっている分、不安な部分は正直なところあります。日本の受験システムが思いのほか変わっていないので、それはデメリットでもあるのではと感じました。私個人としては MYP の４年間が終わったら、２年間は詰め込みになってしまうかもしれませんが、現状に合わせた受験スタイルの指導に思いきりシフトしてしまったほうがいいのではないかと思っています。
私はもともと高校教員なので、１期生が卒業する１年目の大学合格実績はやはり特に重要だと思っています。

音楽科教諭　先生Ｃ（女性）

――教諭としてのご経歴を教えてください。

先生Ｃ　開校準備チームが集められた時の１人として６年目になります。教育長室に集まったとき、作ろうとしている学校の理念を聞いたことを覚えています。
旧浦和市の時から、普通の公立中学校で音楽の教員として十数年間やっていました。そろそろ異動かなという時期にお電話をいただいて、次は高校でどうかという話でした。私は中学校で音楽を教えたいと考えていたので、実は一回お断りしています。しかし、こちらに決定権はあまりなかったようでした（笑）。

1．大宮国際中等教育学校インタビュー

自分としては、普通の公立校で戦ってきたという意識を持っています。小学校にいたこともありますが、小・中学校を見た時に教育相談的な問題が多くありました。それは音楽経験の浅さだけでなく、例えば授業に出られなかったり、反抗的な態度が問題だったりという生徒に対して、体当たりで向かい合うのが好きというか、そういう思いでやってきました。ですので、高校はどうなのかなと正直なところ思っていました。

正直なところ、学校のコンセプトも最初はさっぱりわからなかったのです。IB についてもあまり詳しくはなかったので、いただいた本を読み込んで、1 年間研修を行い、いろいろな学校を見させていただいて学びました。

当時、IB の 1 条校はまだ少なかったこともあり、芸術科目は特に学校ごとに IB の解釈の仕方が異なっていて、各音楽科に任せられているところが多いように感じました。
私としては 1 条校なので、やはり文部科学省が求めるやるべきことと、IB との兼ね合いをどうしたらいいのかということをその 1 年間でとにかく徹底して準備をして、やっていかねばという思いが自分の中にありました。
現在も試行錯誤しながらではありますが、いろいろと研究をして授業を進めています。

――IB の芸術では、どんなことをやるといった決まりはありますか?

先生 C　日本の学習指導要領では音楽と美術は別の教科になり、文部科学省により 3 つの観点が示されていますが、IB の MYP の場合は美術と音楽が一つの「芸術」と一緒になっています。1 年のいちばん最後に文科省評価として 5 段階評価をつけるのですが、それまでは MYP に準じた評価なので芸術として出すので、美術と音楽で擦り合わせをしなければなりません。美術科・音楽科として自分たちで解釈を読み取っていかなくてはいけないところが非常に難しい部分でもあり、他の学校にはない違いだと思います。

――これまでの音楽と美術の授業に比べて、IB での学びで育まれる力にはどんな違いがありますか？

先生 C　芸術としてやはり、今までの学校ではできなかったことがたくさんできることは魅力です。芸術科としてカリキュラムを決めるときも、美術の教員と私で毎日のように話し合いながら考えています。
例えば、私が日本音楽として、三味線と箏について学ばせたいと思っていることを伝えた場合、それでは美術分野では日本の盆器について学ぶことで、音楽的な要素と美術的な要素で「美しさ」という重要概念として通じるところがあるというふうに進めることができます。

また聴覚障害のある方に音の雰囲気を伝えるという探究命題では、まず既存の著作権に問題のない音楽を聴いて、明るい、美しい、遅いといった知覚感受したことを自分の言葉で書いたあと、簡単にスケッチします。その後、本格的に絵を描いたり、写真や動画を撮ってムービーメーカーに入れて、音楽を動画として表してそれを皆さんにお見せするということを音楽と美術でやっています。
その他には、正義のヒーローなどのキャラクターを作ってみるなど、楽しみながらやらせていただいています。

1．大宮国際中等教育学校インタビュー

――こうした授業には表現力や創造力、感性を養う以外の意義というものはあるのでしょうか?

先生Ｃ　音楽と美術に限らず、いろいろな教科の中で我々教員が授業の中で話した内容からつながりを自分たちで見つけてくれるということはあります。
例えば音楽で、ゴスペルの「アメイジング・グレイス」を学んだときには、歴史の時間に学習した奴隷船の話に気づいてくれたり、自然に知識と知識がつながっていく感じはあります。
さらにIBでは、教科の特性だけではなく、ATL（approaches to learning）という、集中して行うですとか計画性を持って行うといった学習の姿勢に加え、「プロセスジャーナル」という記録日誌で振り返り、課題を見つけるという部分を美術も音楽も必ず見ていきます。美術科でしっかり取り組むと、音楽科でも書き方を理解できているといいますか、片方をやるともう一つも上がっていくというような、相乗効果は感じています。

――この学びというのは中高一貫で行うということも大きいですか？

先生Ｃ　大きいですね。特に本校は高校にあたる後期課程にDPコースがあり、DPは英語美術になります。英語美術とは言っても、それは元々芸術だったのでMYPの音楽でやってきたこともDP美術に絶対つながると思っています。私もDP英語音楽の内容を確認して、MYPの中に取り入れるなどして、学びがつながるカリキュラムとして考えています。

――今教えていらっしゃることというのは、他の公立学校ではやっていないことだと思いますが、先生方もいつかは異動されるわけですよね。
異動になったとき、MOISの芸術科の学びはどうなってしまうのでしょうか。音楽と美術を融合させた芸術はIBならではのとても有意義な科目だと思いますが、他校ではやっていないと思います。

神戸では、一つだけいい学校を作っても他の学校はどうなるのだ？という声がある中で、素晴らしいスキルを持つ先生にどんどん異動してもらい、その教育を普及させていくという話があるんです。

先生Ｃ　そうですね。他の学校で簡単にできるものではありませんが、できる範囲でやっていかなくてはと思っています。

本校の取り組みを皆さんにご紹介する際に、私は自分がいつか普通の中学に戻った時のことやさいたま市内でできることはどういうものがあるのかをいつも考えています。

ですので、本校だけの取り組みと捉えるのではなくて、こんなことができますよ、やってみてくださいとお伝えしています。やるかやらないかを判断するのは現場の先生方です。さまざまな実践内容の発信はしていこうと思っています。

1．大宮国際中等教育学校インタビュー

本校の教員がもっと普通の学校でもできることを考えながらカリキュラムを組んでいけば、この学校自体も、教師自身もどこでも生きていけるのかなとは考えています。

国語科教諭　先生Ｄ（女性）

――教諭としてのご経歴を教えてください。

先生Ｄ　この学校は準備チームから参加して今年で６年目になります。もともと外国語学部日本語学科の出身で、一度は海外で日本語教育の仕事をしたいという思いがあったので、マレーシアで２年間ほど日本語を教えていました。帰ってきて結婚をし、10数年ほど夫の転勤に付き合って東北で主婦をしていました。その間は山形県の公立校で１年間英語の常勤講師を務めたり、いずれはIB教育に携わりたいと思っていたので、[redacted]の大学院でIBのTOK（Theory of Knowledge・知の理論）関係の研究をしたりしていました。その前は１条校で初めてIBを導入した、[redacted]中学高等学校（静岡県沼津市・私立）の１期生が高校生に上がるときに赴任をして４年間IB教育に携わっていました。MOISが始まるときに採用試験を受けて、主婦から教育現場に戻ってきました。

――[redacted]は1998年にIB認定されていますが、当時と現在こちらの教育には大きな違いがあると思います。時代ということもあるとは思いますが、それらも含めてお聞かせいただけますか。

先生Ｄ　[redacted]は面白い教育を行っている学校があると聞いて見学に行った時、教室に入った瞬間から生徒が活発ですごくしゃべっていて生き生きとしていたので、ここで教えてみたいと思い、採用試験を受けたんです。

しかしすでに学校が出来上がっているところにIBが入ったので、教員間の理解の差が大きく、難しい場面もありました。ただし、逆にもともとの学校というベースがあるため、かえってやりやすいと感じる点もありました。

当時はまだ１条校でIBを取り入れているのが[redacted]しかなかったので、情報もあまり入ってこず、とにかく模索していました。今思えばあれで合っていたのかなと思うこともありますが、海外で教えていらっしゃる先生で熱心にご助言をくださる方がいたので、アドバイスを聞きながら進めていたという感じでした。

それに比べると、現在はIB校も増えましたし、文科省のバックアップもあり、情報もしっかりと入ってきます。

もちろん試行錯誤は今も続けていますし、自分も研究しながらなので難しい部分もありますが、本校のコーディネーターは、裏にある理論もかなりしっかりと勉強し、それを研修の中で教員たちに共有しています。IB の軸を堅持する姿勢をお持ちの方なので、そこに則って進めていくと、私たちも必然とその理論を勉強し、本来持っている意味合いがしっかり理解できているという感覚はあります。

――これまで IB をメインに据えた教育に取り組まれていますが、通常の日本の教育と特に異なる部分を教えていただけますか。

先生 D　日本の教育でも、主体的な学びや概念学習、評価と指導の一体化などが重視されていますが、自分の受けてきた教育や周りの先生の流れなどがあって、目指しているところまではなかなか実現しにくいのではと思います。

しかし IB 校では、MYP の枠組みがあるというのがいちばん大きな違いだと思います。MYP の枠の中で押さえなくてはいけない概念や問いの立て方、最終評価についてしっかりとプランニングする上、本当に実践しなければなりません。

教員としては準備にかける時間のバランスが変わってきます。授業前の準備がとても大変で、どんな教材を使うのか、生徒に面白みをどこで感じてもらいたいのかといった要素などを考えつつ、ATL スキルを入れて、最後の評価をするためにはどんなステップが必要かということを含めて構成を考えます。

準備さえできてしまえば、実際の授業では 15 分ほど話したら、あとは生徒がほとんど活動している状況になります。生徒が目標に向かって進んでいるか、肝を外していないかを確認しつつ、面白いところに気づいていなければテコ入れをしていくような形ですので、それほどやることが多くありません。ただし、最後の採点業務にも時間はかかります。

以前は採点をしていても「この子、できていないな」と感じていましたが、現在はそうではなくて「こういうふうに仕組んだはずなのにできていないのは、何がいけなかったのだろう」と考えるようになりました。

到達したかったところと異なる方向に生徒たちが進んだということは、そのように誘導してしまった問題がどこかにあったのだろうということです。評価と指導の一体化ということも必然的にそうした方向に向かっていく感覚は教員としてあります。

――特に IB は評価が特徴的ですが、子どもたちのその評価に対するスタンスというのでしょうか。日本の教育の場合、減点主義という部分がありがちですが IB の場合はどうなのでしょう。

先生 D　IB はルーブリックで評価します。記述式なのですが、授業のときは生徒たちに、その評価は良い・悪いで評価したり、人と比べるものではなく、到達度に向かって自分がどこにいるのかを知るためのものだよとにいつも伝えています。

1．大宮国際中等教育学校インタビュー

現在地はできているということだから、では次へ行くには何が足りないのかというふうに考えてもらうようにしています。
ただ１年生の頃だと評価を平均したら何点だった、合計は何点だったと意味のない平均点を自分で出してみる子がいますが、そういうことではないんだよと伝えます。

ルーブリックは特に１年目の子たちには、やはり難しく、理解ができないから評価に結びつかないというケースもあります。生徒たちには徐々に話していき、理解を促しています。

――宿題はありますか？

先生Ｄ　例えば、国語の場合ですと大体年間６個のユニットがあり、各ユニットの最後で総括的評価に取り組みます。コーディネーターからは、課題があまりにもたくさんになってしまうと生徒たちが潰れてしまうので、授業内で必ずある程度取り組む時間を確保するようにと言われています。
レポートを書く際でも、調べる時間や書く時間を１タームとか２タームとか100分～200分は取ってあげて、その１週間後くらいにレポートをテストする形などで進めています。

――IBで学ぶ子どもたちは、授業に臨むために知識を蓄えなければならないため、自ずと勉強してくると聞くことがありますが、そのあたりはいかがですか？

先生Ｄ　DPの授業は議論が中心となるので、「読んで問いを見つけてくる」というところは自分の作業だよ、とは伝えています。実際にはどのあたりまでできているかはわかりませんが、生徒たちからは学校頼みではない姿勢を感じます。

――そのようにいろいろなものが主体的になるようにできているわけでしょうか。

先生Ｄ　そうですね。授業時間のほとんどは生徒が話している状態です。話し合いを進める中でよくやるのは、与えられた時間から配分やプレゼンの準備までを自分で考えさせることです。こちらはやってほしいこととゴールを伝え、生徒自身に決めさせていますが、むしろそちらのほうを面白がってやっていますね。おそらく自分自身が考えて仕切っていくことで、自分は傍観者ではないという視線になるのではないか、それは社会のあり方についても同様なのでは、と個人的には思っています。

生徒Ａ（2年生・男子）

――この学校が他の学校とどう違うかですとか、どんなところがいいと思うかを教えてください。
生徒Ａ　他の学校を知らないので僕の予想になってしまいますが、この学校が本当に特殊だなと思うところはまず、定期テストがないことです。

1．大宮国際中等教育学校インタビュー

定期テストがないので、テスト前に詰め込んで勉強するということがありません。探究型の授業が多いので、自分が学びたいことをより多く学べます。僕の場合は、プログラミングが好きで勉強させてもらっているのですが、そういう時間が多く取れるというのが、他の学校といちばん違うところじゃないかと思います。

――プログラミングはもともと好きだったんですか？　それとも MOIS に入ってから始めたのですか？

生徒Ａ　この学校はクラブ活動が「クラブアクティビティ」という名称で特殊な形態です。
いくつかしかありませんが、PC クラブの見学に行かせてもらった時に先輩たちがプログラミングしているのを見て面白そうだな、やってみたいと思いました。

――プログラミングは普段からの探究的な学習の時も継続して学んでいるのですか?

生徒Ａ　例えば数学の二次関数を簡単に実行できるようなプログラムを作ってみる挑戦をしています。まだ不完全で二乗が認識できなかったので、改善を試みています。

――その学びというのは、どういう風に進めているのですか?

生徒Ａ　例えば数学の授業はけっこう顕著で、先生がまだ習ってない難しい問題を出してきて、まずは自分で頑張って解いてみて、その後でみんなで共有します。
先生が言うには、聞くだけだったら 10%の理解だけれど、教えることによって 90%理解できるのだそうです。教え合うことを重視していると感じます。

――今のそういった学びは、自分の将来にどんなところが役立ちそうだなと感じますか?

生徒Ａ　MOIS の場合は、詰め込み勉強をして大学受験をしていい企業に入るというよりも、自分の学びたいことを学んで世界に貢献していくということを目標にしています。

僕もここで学んだことを生かして起業してみたいと考えています。全員が全員というわけではないですが、将来のことを考えている人もけっこう多くて、最近だとそういう人たちと一緒に屋台を出してみたいねと話しています。

――屋台、いいですね。世界で流行っていますものね。そういうふうに将来のこととかは周りのお友だちともけっこう話されたりするんですか?

生徒Ａ　具体的な将来についてというよりも、いい大学に行っていい会社に就くよりは、自分で会社を作って自由に生きたいよねみたいな感じで話しています。

1. 大宮国際中等教育学校インタビュー

――親御さんはどう思われているんですかね?

生徒 A　僕の親は「自分が好きなように生きなさい」と言ってくれています。

――小学校の時のお友だちと学校のこととかを話されますか?

生徒 A　僕の場合は、公立中学校に進学した友だちともけっこういろいろなことを話しています。でも MOIS は長い時は 7 時間授業まであるので、そこから家に帰ると時間が合わなくて。地元の祭りとかで会って、近況報告くらいはしますね。

――MOIS での生活について、近所の公立中に進んだ子たちにどう言われますか?

生徒 A　地元の子たちが近くの公園で部活の練習をしている時に自転車で通りかかった僕を見て、授業数が多いし、土日も学校があるので、大変そうだと思われているようです。

生徒 B（1 年生・女子）

――土曜日は隔週で LDT という自分の学びをプロデュースする日で本日はそれにあたりますが、今日はどうされていましたか？

生徒 B　「MOIS CUP」という校内のディベート大会の本選が今度行われるのですが、今日はその予選でした。

――それはお疲れ様でした。手応えはいかがでしたか?

生徒 B　手応えはけっこうありまして、実は全勝しました。

――すごい！　素晴らしいです。
生徒 B　ありがとうございます。

――MOIS に入学されておよそ半年が経ちますが、どんなところが魅力だと感じますか?

生徒 B　定期テストがないのでその時間を活用して、自分なりに計画を立てて好きな勉強ができるところがいいと思います。部活がないこともやはり、自分のやりたいことにしっかりと時間を費やすことができます。そのあたりが普通の学校とは違うのかなと感じています。

1．大宮国際中等教育学校インタビュー

――ご自身が好きなことや今進めていらっしゃることは何ですか?

生徒Ｂ　今日のディベートは英語でやってきましたが、私はもともと [redacted] まで [redacted] / [redacted] で過ごしました。日本人学校で普通に日本の教育を受け、[redacted] の時に帰国して日本の普通の公立小学校に編入したのですが、インターナショナルスクールや現地校に通っていなかったとしても、外国人と話す機会はけっこうありました。もともとは英語が特に好きというわけではありませんでしたが、日本の小学校に来てから英語に触れる機会が減り、心寂しく思いました。その時にやっぱり自分は英語が好きなのだと感じましたし、英語が話せるということは大事なのだと思いました。

英検やTOEICといった試験で自分の能力を測ることも大事だとは思いますが、自分は英語を使って何かをするのが好きで、他の教科と比べると英語が得意なのだということがわかってきて、いろいろなことに挑戦しています。市の英語の暗唱大会では [redacted] になりました。その後「全国中学生英語ディベート大会」に挑戦しました。その時はディベート自体が初めてだったので残念な結果ではありましたが、MOISでは英語を使う機会の情報をたくさん集めることができます。

――挑戦するチャンスがたくさんあるのは素敵なことですね。

生徒Ｂ　自分がMOISの中でどのあたりのレベルにいるのかは明確にはわかりません。ディベート大会などに参加する人たちは、やはり英語を積極的に使っていたり得意だったりする人が多いので、その中ではもっと頑張らなきゃと思うことはあります。しかし、英語の授業では自分は人に頼られる側なのかなという実感はあります。
積極的に英語の先生とコミュニケーションを取ったり、わからないことがあっても日本人の先生にすぐに聞くのではなくて、ひとまず外国人の先生に聞いてみたりと、小さなことからでも英語に触れることを大切にしています。
――将来はどうしたいという夢や希望はありますか?

生徒Ｂ　現在の考えでは、MOISにはグローバルコースという海外大進学をメインにしたコースがあるのでそこに進んで、いずれは [redacted] に直接進学したいと思っています。
――そこで何を学びたいのですか?

生徒Ｂ　大学で情報システムについて学びたいと考えています。将来は [redacted] から大学院に進み、その後は [redacted] で起業をして、情報管理システムとインテリアデザイナーという仕事を掛け合わせ、最先端の家を作っていきたいと考えています。

私はこれまで文系が得意でしたが、最近は理系の学びのほうが楽しく、得意になってきたということがわかったんです。自分自身が楽しいと思うことに取り組んでみたいんです。

1．大宮国際中等教育学校インタビュー

――理系が好きになったきっかけや、できるようになってきた理由はどんなことですか?

生徒Ｂ　小学生の頃は本当に数学が苦手で、泣きたくなるくらい無理という感じでしたが、中学受検が終わって入学するまで1～2ヶ月ほど時間がありました。新しいスタートと共に数学を得意にしたいという気持ちがあったので、春休みはほぼ毎日数学に取り組んでいました。

なので、いきなり数学が好きになったわけではありませんが、例えば国語だったら文章中に答えがあったり、社会なら知識を覚えてそれを活用したりという感じだと思うのですが、数学は自分なりの方法で考えて答えを探りだすという、目に見えない正解を見つけるというところが魅力的だと思い、数学が大好きになりました。
その春休み中に中学の範囲の数学を終わらせて、今は復習しているところです。問題をしっかりすべて解けるのかと言われたらちょっとまだ怪しいところもあるかもしれませんが、現在は次のステップとして海外大進学のための奨学金獲得を目指して数学を勉強しています。

――最初は苦手克服のためにやっていたのですね。その学びの過程でMOISEの先生方と絡んむということありますか?

生徒Ｂ　どこでつまずいたのかということをできるだけ自分自身で理解しようと思っています。わからない問題があったら先生にどんどん質問していますが、基本的に先生に自分の学習状況を伝えるのは、ポートフォリオ検討会という三者面談くらいです。

――ディベート大会も頑張ってください。

生徒Ｂ　ありがとうございます。3連勝しているチームが他にもありますが、とりあえず決勝には出られそうなので、優勝を目指したいです。

生徒Ｃ　(3年生・女子)

――この学校はある意味で特殊だと思うのですが、そのあたりについて他とどう違うか、どんなところがいい部分だと感じていますか?

生徒Ｃ　いちばんの特色は、定期テストがないところだと私は思っています。普通の学校だと例えば定期テストの2週間前から勉強するといったことが必要です。しかしそうではなくて、いつでも課題があるというのが、生徒にとって負担になるところでもあるし、でもずっと勉強が継続できるというところでは、いい面でもあると思っています。

1．大宮国際中等教育学校インタビュー

部活動が３期制で分かれているので、入ったり抜けたりが気楽です。気軽にできるというのは負担にもなりにくいですし、あまり活発でないことについて、それがいいという人もいます。

――いい意味で、いろいろつまみ食いできますよね。

生徒Ｃ　そうですね。いろいろな体験はできると思います。

――探究活動でご自身のテーマにしたいことや、興味があるのはどんなことですか？

生徒Ｃ　４年生で「パーソナルプロジェクト」に取り組みますが、それに向けて今は調べている段階です。

――先ほどおっしゃっていた課題はいつも先生から出されるのですか、もしくは自分で課題を見つけて取り組むのですか?

生徒Ｃ　中学３年間取り組む「3G Project」という探究活動のテーマは先生から提示されます。学習目標などの評価項目は決まっていて、書き方などの指定はありますが、具体的に何をするかという内容は自分で決めます。

――自分でやらなくてはないことがたくさんあるのでしょうか。

生徒Ｃ　テーマは多岐に渡っていてある意味何でもいいんです。１年間ほどのプロジェクトとして進めるにあたり、やりがいのあるテーマを選ばないと大変ということがあります。

――もともとそういった自分で決めることは得意でしたか?

生徒Ｃ　そんなに得意ではなくて、今も困ってるぐらいなんですけど（苦笑）。でも MOIS に入って 3G の活動以外にも、例えば技術家庭（デザイン）の時間には社会課題の中から自分の関心のあるテーマを選ぶなどの活動が多く、やりがいがあります。ですから、テーマを与えられていた小学校の時よりも、今は主体的に勉強できるのでそういう面では成長しているかなと思っています。

――ここで学んでいることで将来役立てたいとか、役立つだろうと感じることってありますか?

生徒Ｃ　いちばん大きいのは、コミュニケーションスキルとパソコンスキルだと思います。今、GIGA スクール構想と言われていて、それぞれパソコンを持っていたりすると思いますが、MOIS は Word、Excel、PowerPoint などを日常的に使いこなしています。こういう力は絶対に必須になってきます。英語なども同様ですがツールとして使うというのはあるので、そこは社会人になっても役立つところかなと思います。

1．大宮国際中等教育学校インタビュー

――パソコンを使うかノートを使うかは、自分で取捨選択して使いやすいほうを選ぶのですか?

生徒Ｃ　そうです。基本的には先生が作ってくださったプリントに書き込むことが多いですが、例えば数学の問題集をやってくださいと言われたとき、それはやる人もいるし、やらない人がいるのと一緒です。やりたい人は自分でノートを買って好きなように取り組むという感じです。

――もしも公立中学に進学していたら、これから高校受験があると思うんですけど、その辺りはどう思われますか?

生徒Ｃ　中学受検を経験しているので、総合的に見たら一緒かなと思いますが、高校受験がない分、将来のことについてロングスパンで考えられることはいいことです。大学を調べるなどのキャリア学習を今のうちからできるのは、高校でストップがかからない分、いいことだと感じています。

でもその分、高校受験に危機的な状況になるということがないので、中だるみをしてしまうということはあります。

――今のところ、将来は何がしたいとかあることありますか?

生徒Ｃ　子どもが好きなので、教育系に進みたいと考えています。

生徒Ｄ　（4年生・男子）

――MOIS は既存の公立中学校・公立高校とどんなところが違うと思いますか？

生徒Ｄ　入学して何ヶ月後かに気づいたのが、英語教育の質です。
今の日本の英語教育はまず文法を習い、テストではすべての文法が合っていなければ間違いという学習だと思うのです。しかし結局その教育では英語は身につかず、結果話せる人はあまりいないのではないでしょうか。
MOIS では文法を学びません。その代わり、会話をするチャンスがたくさんあります。
校内に帰国生が多いことも特徴です。英語ができる彼らと普段から会話をすることで、あんな風に流暢に喋りたいと自分も刺激を受け、モチベーションが上がります。海外と日本の文化や教育の違いについても知り、比較することができます。

――もともと英語に興味はあったのですか?

1．大宮国際中等教育学校インタビュー

生徒Ｄ　ありました。[redacted]ほど、[redacted]に通っていましたが、全然力がつかなくて、常々なぜだろうと思っていました。

でもMOISに入って、英語を話す機会が多くなったら急に伸びました。英語を話せると、英語の先生はもちろん、外国人とも会話できるようになって、海外に友達も増えますし、視野が広がりました。そういう面でも英語が好きですね。

――英語を使って世界のいろいろな方とつながる経験や視野を広げる機会にはどんなことがありますか？

生徒Ｄ　先日、[redacted]へプライベートで行き、現地在住の親の友人を訪ねてきました。彼らは日本語は使えないので、コミュニケーションは英語で行いました。自分が小さいときは英語が話せなかったので何を言っているかわからなかったのですが、今は若干話せるようになったので、関係性を深められたことがうれしかったです。

そのほかに、僕は今「全国高校生英語ディベート大会」に参加しています。MOISでは、自分で論を作って深めることが多く、先生に頼らず自分たちの力で意見や考え方を伝える練習をしています。

こういう理論を構築する時に大切なのが知識です。MOISでは知識を入れるというだけでなく、かつそれを使って応用するというスキルを磨くことができます。

でもデメリットもあって、知識を持っていないと応用はできません。だから、自分で知識を吸収するというスキルも必要になってくるので、そこは少し難しいところかなと思っています。

――それは自分で取り組まなければ何も始まらないということだと思うのですが、そこには入学してご自身で気づかれたのですか?

生徒Ｄ　受検をするときに通っていた塾の先生から、MOISに入ったら自分でやらないと置いていかれちゃうよと言われていました。その塾には中３まで通い続けて、普通の学校でいう基本的な知識を入れて、学校ではその知識を使うという感じで、無駄がないように学習していました。

――将来やりたいことは何ですか？

生徒Ｄ　医師になりたいと思っています。医療はやはり豊富な知識がないと携われません。MOISには自分で課題を見つけて解決するという探究活動があります。そこで医療のことを学ぼうと思ったのですが、現状高校生の段階では実行できることは少なく、自分で行動を起こすには少し難しいと感じました。

――医師になりたいと思ったきっかけは?

1．大宮国際中等教育学校インタビュー

生徒Ｄ　１年生の時、これは本当に情けないことなのですが、犬の散歩をしていたら犬が逃げてしまい、追いかけたら転んで腕を骨折してしまい、大きな病院に行ったんです。そこで初めてお医者さんの仕事を間近で見て、こういう職業もあるんだなと思いました。
先生に助けていただき、すごくうれしかったので、自分もそういう立場になりたいと思ったことがきっかけです。

――医学部を目指されるとのことですが、受験対策はどのようにされていますか?

生徒Ｄ　上記の通り、医学部は中学生の時から目指しているので、この学校の勉強だけでは適応できないということに気づいていました。ですので、先ほども言った塾に中学３年間は通い続け、高校生になってからは受験予備校に通っています。塾では常に、学校で学ぶ単元のその先の単元を勉強して知識を入れて、学校ではその知識を使って応用問題を解く学習を進めています。授業がない日も毎日、予備校の自習室に通って、できるだけ多くの知識を詰め込もうと思っています。このスタイルは僕に合っていて、とても良いサイクルが生まれており、自分自身の刺激にもなっています。

生徒Ｅ（5 年生・女子）

――MOIS の１期生として、改めまして同校の教育のどんな部分に魅力を感じていますか？

生徒Ｅ　面白いと感じるのは、最低限の知識は必要ですが、普段から知識ベースではなくて、思考力だったりグループディスカッションをメインに行っているところです。

MYP や DP を導入していることもあると思いますが、相手の言っていることや話し合いを通して、相手の考え方や見解などを知ることにより、相互理解が深まるようになると感じています。

私自身、DP のグローバルコースを選択していますが、考える時間がとても多くて、物事に対しての捉え方をいうことを根拠とともに探ることを大事にしています。
そこはやはり他の学校と違って、ボリュームを持った学習になっているかと思います。

――考える時間って大事なだけでなく、とても贅沢な時間ですよね。同時にアウトプットも大切ですよね。

生徒Ｅ　そうですね。１年から３年のころは、総括評価課題というものがユニットの最後にありました。
例えばプレゼンテーションなどもしましたし、ディスカッションをしているところも評価されます。

1．大宮国際中等教育学校インタビュー

プレゼンやグループディスカッションはもう当たり前になってきています。プレゼンだと、一方方向な部分もありますが、今DPでやっているのは、例えば読んだ本についての解釈をプレゼンし、反論や反駁してもらったり、こんな解釈もできるんじゃない?と、新しい視点を取り入れてもらったりして、相互方向の学びが生まれています。

アウトプットももちろん大事ですし、今までやってきたことではあるんですけど、5～6年生になると、さらにそれがレベルアップして、相互感のコミュニケーションになっていくのかなと思います。

――今の学びを将来にどう活かしたいといったことはありますか?

生徒Ｅ　私自身、どこの大学に行きたいとか将来の夢がこれだということは、まだ決定していません。でもこの学びは、どこかしらにはつながると日常から思っている部分があります。
例えば人間関係を円滑にする上でコミュニケーションはやはり大事です。体育や他の副科目などでもたくさんのグループワークを行っていますが、自分の意見を通さなければいけない時にどう説得したらいいのか。でも説得する時に、相手に不満や不快さを感じさせてはならないので、どういう雰囲気に持っていくのか、どんなふうに合意形成を図ったらいいのかなどを考えます。
そういう一見簡単そうに見えてそうでないことが、思考のプロセスによって、今人はこういうふうに感じているのだと認知するという原点をあらためて学んでいます。
そうした経験が、コミュニケーションの中で自然にできていくといいのかなと思っています。

あくまでこれは一例ですが、将来企業に入るにしても自分で何かやるにしても、人間関係は最も大事だと思うので、そこでは必ず活かせると思います。

――お話の中で感じたのですが、人の考え方をいろいろ知ったり、取り入れたりというのはお好きですか?

生徒Ｅ　自分自身の話になってしまいますが、リーダーシップを取る場面がかなりありました。
例えば学年の学級委員会だったり、自分たちで音楽系のイベントを校内で作っています。グループのメンバーももちろんもいますが、そこでリーダーを取っているとやはり、フォロワーになっていく人が見えなくなっていくというところがどうしてもありました。

それを私自身がし理解しているので、そうならないように、コミュニケーションを大事にしています。

――フォロワーのことが見えなくなってしまっていた、ということに気がつくきっかけがあったのですか?

生徒Ｅ　やっているうちにわかってくる部分があるのですが、この学校にそういう機会がありふれているから、ということがやはり大きいと思います。

委員会もそうですし、クラブは３年間同じ部活をやるのではなくて、１期１期で入りたいものに入れるというシステムがあるので、それぞれの場面でリーダーになる人ももちろんいますし、他にも私のように新たな活動をする人もいます。
そういう場面がたくさんあるので、その分リーダーシップを取る機会も多いんです。
ですから、そうした活動をやっていくうちに経験としてわかってくる場合もありますし、自分がフォロワーになった場合にも何ができるだろうということもたくさん考えます。
そこが大事というか、そうしたことを経験してきたから、知識や理解を得ているのかなと思う部分はあります。

――そのイベントとは、どんなものなのですか？

生徒Ｅ　校内にはもともと音楽活動をしている人がすごく多いんです。でもコロナの時期に発表する機会がないとなった時に、バンドだったり、ダンスだったりの表現の場を作ろうとイベントを企画しました。

結局、計画初年度はコロナでできなくなってしまったのですが、去年は改めて組織を作り、先生方とも連携を取りながらイベントを成功させました。
今年は部活の人たちを呼ぶなどして、さらに規模を大きくして開催したいと進めています。スケジュール作成をはじめ、どんなプロセスで動いていけばいいのかという組織の動かし方など学びがあります。自分の好きなことができるというのもいいところで、イベントを作っていくことがすごく面白いですね。

生徒Ｆ（5 年生・男子）

――こちらで学んで５年目、１期生として先生方の期待を一身に背負って学ばれていると思いますが、他の学校と比べて何が違うか、MOIS のどんなところが面白いなと感じますか？

生徒Ｆ　僕個人としては、他人の話をよく聞く力とその話を聞いてそれに対して適切なレスポンスをする力が身についたと思っています。これらの力を相互で関係させ合いながら、スキルが磨かれ力を育まれました。
人間関係を構築する上で、話し合いや議論は基本的なことではあると思いますが、高度なレベルで実現できているのかなと思っています。

昨年度、僕自身はディベートに参加しました。ディスカッションをする上で、自分の意見をただ伝えるだけではなくて、それまで築いてきた話し合いというものがある中で、それをどうもう一歩上のレベルに発展させていくかということを、僕だけではなくチームメンバー全員が意識しながら進めていくことによって、話し合いがより活発になった経験があります。

そういう経験から、人の話を聞く力というのと自分の意見を人の話を聞いて、その土台の上で自分の意見を伝えるという力を総合的に伸ばしていけるというのが、この学校の教育のいいところなのかなと思っています。

――その力を磨くということは、日常的に行われていますか?

生徒Ｆ　２つ要因があると思っています。１つは普段の授業において、例えば国語の「言語文化」という科目や社会などの授業でディスカッションする機会が豊富にあります。そういう力はこれらを通じて身についたのかなと感じています。

もう１つは、学校生活の中に多種多様な選択肢があります。それらを自分で選んで経験していく中で、そういう力が養われたのかなという実感があります。

――それは例えばどんなことなのか、具体的に教えていただけますか?

生徒Ｆ　「アフタースクールアクティビティ」という放課後の時間があります。他の学校では、放課後は部活に使われることも多いのかなと思うのです。僕自身は部活にも所属はしていますが、それ以外にも様々なプロジェクト活動をしています。

例えば中３のときに、僕は生徒会執行部として活動していました。４年生では先ほどのＥさんからも話があったと思いますが、[redacted]を彼女たちと[redacted]で企画して運営した経験があります。

あとは[redacted]としても活動したり、先に触れたディベートにも参加したり、今年は部活をしっかりとやりたいと思っていますし、本当に１年ごとにいろいろな経験ができます。
そういうところで人の意見を聞いて伝えるということ以外にも、さまざまな経験が得られたのかなと僕自身は思っています。

――選択肢が多く、いろいろなことをできるのがこの学校の魅力の一つだと思いますが、それを選び取っていくのは自分自身です。その気質というのはもともと入学時から持っていらしたのですか。

生徒Ｆ　僕個人の話をすると、３年生の時に生徒会執行部として活動したことが一つの大きな転機になっています。４年生ではたくさんのことに挑戦してみようと思っていろいろとったという感じです。
そこに関しては、その人自身のやりたいという気持ちがないと掴み取れないものなので、そういうところを伸ばしていけるとこの環境がより活きてくるのかなと思っています。

――生徒会執行委員になりたいと思ったきっかけは？

1．大宮国際中等教育学校インタビュー

生徒Ｆ　小学校の時ももともと、　[redacted]に所属はしていて、学校をより良くしようとか、学校という組織を運営するというところに興味はありました。
MOIS で初代生徒会執行部が誕生するということを聞いてやってみようかなと思いました。

――学校をより良くしようという活動をされている中で、学校として世界をより良くするという考え方があると思います。それらを含めて、ご自身の将来の描き方はどのように捉えていらっしゃいますか。

生徒Ｆ　経済系や経営系の分野に進みたいと考えています。それを見越して、現在は外部のビジネスコンテストにも参加し、経営や経済分野を学んでいます。
いろいろな選択肢の中から関心のある分野に合わせて、これが将来にいちばん活きるだろうという選択肢を自分で選び取ることができたのは、この環境のおかげなのかなと思っていますし、自分で考えて掴み取ったものだと思っています。自分で考える力ということは必要だと思います。

――ビジネスコンテストというのは、何かアイディアを競うようなものなのですか?

生徒Ｆ　起業の種みたいなことを考えているというか、そこからビジネスをどう考えていくか、どう作ってそれをお客様に届けるかというところのいちばん初歩の部分について、４人グループで実践を通して学んでいます。

――ちなみに、経済とか経営とかどんな分野に興味があるのですか?

生徒Ｆ　経済や株価など、そういう大きいものを回していくようなアナリストではなく、僕としては一対一のコミュニケーションというか、一企業に対してアプローチしていきたいというところに関心があります。例えば「中小企業診断士」やもしくはコンサルタントという仕事に興味があります。

――ミニマムな地に足がついたところへのいろいろな方たちを支えたいということですか？　それはいつ頃から興味が湧いたのですか？

生徒Ｆ　４年生からです。「MOIS MUSIC FES」いうイベントの運営を通して、もちろん組織全体についてしっかりと考えましたが、それとは別に一つひとつの団体とも接して話をしていったので、そういうところで組織全体の運営だけではなくて、その組織の中の一つのパーツとどう向き合っていくかというのに触れて興味を持ちました。

――森を見ながら、木も見るということですね。志望大学はどこになりますか？

生徒Ｆ　大学は [redacted]を目指しています。海外大は僕自身はあまり考えていませんが、周りのクラスメイトの中には考えている人もけっこういます

1．大宮国際中等教育学校インタビュー

リベラルアーツというコースに所属していますが、グローバルコースにいる人たちは海外に目を向けている人が多いと思います。

この学校でちょっと残念だったと思っていることが一つあるので言わせてください。それは部活や文化祭などの課外活動の始動がすごく遅かったことです。
文化祭は僕らが４年生の時、つまり昨年の４年目にできたんですけど、それも僕らが文化祭を作りたいというふうに、それこそ３年生の生徒会執行部の時に自分たちで企画書を出して、それが通ったという形で実現しました。ういういわゆる青春みたいなところに関しては、設立１年目の自分たちが初代であるということを抜きにしても楽しみたいところはあると思うので、早くできればよかったなと思っています。

――もっと任せてほしかったという思いですか？

生徒Ｆ　任せてほしいんですけど、企画自体は先生方からも出していただくということも大事なのかなと思っています。文化祭以外にもいろいろなイベントなどを早く行っていくことで、生徒たちの経験値も上がっていくと思います。

保護者Ａ（1年生・男子）

――お父様ご自身は中学受験のご経験は?

保護者Ａ　ありません。普通に高校受験、大学受験だけです。

――こちらの学校は、保護者世代が受けてきた教育とかなり違うと思いますが、どんなところにそれを感じますか？。

保護者Ａ　いちばんの違いはやはり英語に力を入れているということです。学校にはネイティブの先生もたくさんいらっしゃったり、英語で学ぶ授業もあったり、子どもが英語と接する機会がとても多いというのがやはり大きな違いだと思います。

――それらをあわせて、この学校の魅力とはどんなところだと思いますか？

保護者Ａ　英語の他には、子ども自身が自分で考えてやらなくてはいけない課題がたくさんあるところも魅力だと思っています。
この学校は、覚えることより、考えることや自分でアウトプットすることにとても力を入れているというイメージがあります。それが子どものためになっていると感じます。

1．大宮国際中等教育学校インタビュー

――お子さんの成長を感じるのはどんな時ですか?

保護者Ａ　いわゆる適性検査型の入試なので、自分で考えて応用して解くという問題が多いため、暗記型では突破できない経験を受検では積んだと思いますが、そうした思考力が伸びている感じはあります。

自分でスケジュールなどを考えて取り組んで、レポートを出してといったような、大学や社会人になってやるようなことを先取りしてやっているイメージです。

話している内容も論理的というか、ちょっと理屈っぽいところもありますが、そういう会話が増えた気がしますね。学校の影響が少し出ているのかなとは感じます。

――実際お父様もビジネスの最前線にいらっしゃると思うんですが、こちらの学びがお子さんの将来においてどんなところで役に立ちそうと思われますか？

保護者Ａ　英語を使わない仕事ももちろんありますが、英語ができることによって、選択肢は広がると思います。仕事の選択の幅も増えますし、実際に仕事の中で英語が出てきた時にも経験が活かせそうですね。
先の話と重なりますが、自分で考えてアウトプットを出すというのも、仕事にもよりますが、社会人になると割と必要なスキルだったりします。

今までの教育だとそれをなかなか経験していない中、会社に入ってじゃあ会議をやるんで、司会をやりなさいといきなり言われてもできないですし、同様に企画を考えて企画書を作れと言われてもなかなかできるものではありません。
会社の中で学んでいく代わりに、中高でその基礎を作っているところが役に立つかなと思います。

――お子さんの将来の夢は聞いていますか?

保護者Ａ　将来の夢はまだあまり考えてないようですが、自分のやりたいことが見えてきた時に今の英語力があれば、選択肢として持っておけるのはいいと思います。自分が好きなことを見つけていってほしいですね。

――受験した学校は？

保護者Ａ　他には［　　］も受検し、一次試験が終わった段階で両方の合格をいただけました。［　］は通学も楽でしたが、面接があるので息子の性格的に少し難しいかなと思いました。MOIS は集団試験でしたし、校風も自由です。適性的にこちらのほうが向いてそうだとは感じましたが、息子に聞いたら MOIS を受けたいということで、こちらを受検し、幸い合格をいただけました。こういう学校へのニーズは高まっているのかなとは思います。説明会に来るような方々なので、当然熱意は持っているのでしょうが。

1．大宮国際中等教育学校インタビュー

自分が学生の時にこういう教育を受けたかったと本当に思います。子どもに代わって通学したいくらいです（笑）。
なお、息子に聞いたところ、ここの学校の魅力は「校舎もトイレもきれいで、設備が充実していること」と言っていました。それだけで決めたわけではありませんが、6年間を過ごす上で重要なことです。

保護者B（2年生・男子）

――親世代が受けてきた教育とMOISの学びは大きく違いますが、いかがですか。

保護者B　全然違ってびっくりしますよね。本当に羨ましいです。
実は子どもに、このインタビュー受けるにあたり、学校に通ってみてどう?と話を聞いたんです。他の中学校との違いを聞くとまず、「先生が授業中、ほとんど黒板に立たない。いきなりグループでディスカッションが始まるんだ。これは他校と大きく違うところじゃないかな」と教えてくれました。

だからこそ、復習や予習はすごく必要なのだろうなと思います。
学校でも英検などの情報を提供してくれたり、年に2回、模試のようなものがあるので、自分が今どのレベルにいるのかというのは判断できます。
ただ、息子を見ていて、高校受験がないせいか、中だるみしてしまっていると感じるんですね。
彼自身も明らかにまずいというのはわかっていると思うんです。中学受検を経験してきているので、きっとやるべき時になったらやるのではと期待しています。

中学受検の時は私の言うことを素直に聞いてくれていたのですが、彼はこれからどんどん成長していくので、親が言ったことをそのまま鵜呑みにするというのは、きっと違うのだろうと思っています。

彼が気づいた時に、やる気スイッチが入るのかなと見守るようにしていますが、おそらく周りにいるお友だちの影響が大きいのではないかと思っています。

今日は「MOIS CUP」というディベート大会の予選会でした。息子は去年と今年と出場していますが、学校の勉強をしているところは見たことがないのに、そのディベートの資料集めや原稿作成など、昨夜も友だちとZoomで熱心に打ち合わせをしている姿がありました。普通の中学校では、なかなかできない経験なのではと思うのです。

こうして仲間たちと、自分たちのさまざまな思いを言葉にしていくことは、単元を学ぶこと以上に大人になって生きていく上で、とても必要なことなのではないかと思っています。それはMOISに来たから、自然とそういったことができる環境にいま彼がいられるのだなと感謝しています。

1．大宮国際中等教育学校インタビュー

こういうディベートなどに興味がある息子なので、普通の会話でも論破されてしまいますが（苦笑）。

――それらも含めて、お子さんの成長をお感じになられている部分はどんなところですか？

保護者Ｂ　まだまだ子どもだと感じることももちろんありますが、自分でやることなどのスケジュールをパパッと立ててやれるようになっています。
中学に入ってからは、私に見られることが嫌なようで、あえて私も見ないように心がけています。先に彼が親離れしていってしまい、かなり寂しいというのが本音ではありますが。

――お母様はお辛いと思いますが、息子さんにとって必要な成長段階なのだなと感じます。こちらの学校で受けている教育でどんなことが将来役に立つかと思われますか？

保護者Ｂ　英語力がついてきているのは見ていてわかります。野球がすごく好きなのですが、外国人選手がインタビューを受けている内容を訳してみてとお願いするとしっかりできるんです。「この選手はちょっとスペイン訛りがあるな」なんて言ってみたり。
英語は小学校の時に学校で学んだ程度です。MOIS では毎日英語に触れていることが大きいのだと思います。息子は何かしらの形で仕事でも英語力を活かせればいいなと言っていました。

――他の中学に行かれた保護者の方とお話しされる機会はありあすか？

保護者Ｂ　話します。中学校って３年間しかないですし、まだ中２なのに内申点をすごく意識して部活に取り組んだり、定期テストを気にしたり、とても大変と聞いています。やっぱり MOIS に来てよかったと思います。何よりも MOIS に来て子どもたちを見ていると、周りの子たちとの関係性がお互いに良くて、素晴らしい相乗効果を持っていると感じます。

保護者Ｃ（3 年生／1 年生・男子）

――二人のお子さんが通われているのですね。

保護者Ｃ　ありがたいことに、ご縁がありました。

――親世代が受けてきた教育とこの学校の学びは大きく違いますが、いかがですか。

保護者Ｃ　妻ともいろいろ話してきたのですが、この学校は生徒たちが主体となって学ぶというところがいちばん大きな特色なのだと思っています。

1．大宮国際中等教育学校インタビュー

MYP プログラムに沿って、クラスとグループという立て付けが２つある中で、特にグループは少人数で勉強する形を取っていますし、学校の雰囲気はいいのかなと思っています。
「LDT」という、自分の学びを自分自身で自由に選べることもあり、かなり楽しく過ごしている印象があります。

全体的に探究学習がメインの学校なので、２人の子どもを通わせる親の目から見ると、上の子は探究が大好きなんです。下の子は与えられたことはやるけれど、なかなか自分から主体的に取り組むのは性格的に難しい面があります。ですから積極性があればいい学校ですが、そうでないと少々難しいのかなというイメージはあります。

――3 年生のお子さんは、もともとそういう主体性のある子でしたか？

保護者 C　自己肯定感はもともと高かったのですが、この学校に入ってさまざまな活動を通して主体性がついてきた感覚はありますね。

定期テストがないというところもこの学校の個性です。これは先ほどの積極性などの部分につながると思うのですが、成績表を見ても結局、他と比べることがあまりないので、それで満足するかしないか。よく言えば、小学校の運動会でも順位をつけないとか競争があまりないというのは今時の学校教育なのでしょうが、若いうちは適正な競争が必要な気がするのです。
強制的な競争は問題があると思いますが、本来は人間形成をする中学・高校の時に、ここでは勝つし、ここでは負けるといったような、揉まれる経験があったほうが社会に出てからいいのではないかな、と思います。

――でも中学受検もされていますし。

保護者 C　そうですね。公立しか受けなかったので、中学受検の時にそこまでの勝ち負け感というのはあったのかどうか。私立の中高一貫校を受けられる方たちは、塾でのクラス分けなどでも現実を突きつけられると聞きますが、うちはそういう経験を全然していないので。

上の子の時は転勤族でして、埼玉に来たのは [redacted] でした。6 年生になって初めて公立の中高一貫校があるんだということを知ってからのスタートで、6 年の夏休みから塾に行き始めました。下の子は塾に行かずに受検に臨みました。

公立の入試は考え方を問われるので、問題に書いてあることを読み取って回答すればいいだけです。私立だと知識がないと解けない出題がされるので、そこは塾に行っていなかったら絶対追いつきませんが、公立の試験だったので何とかいけたのではないかなと思います。

1．大宮国際中等教育学校インタビュー

――性格の違うご兄弟が入学されたのをご覧になった上で、どんなところを子どもたちの将来に生かしてほしいと考えですか？

保護者Ｃ　授業などをはじめ、プレゼンする機会が多い学校だと思っています。自分の取り組みをプレゼンする「ポートフォリオ発表会」といった発表する場なども含めて、プレゼン能力はだいぶ高くなるので、そこは社会に出て役に立つのだろうなと思っています。

あとは国際を謳っていますので、英語力や国際的な感覚を養うには、かなりいいのではと思います。

なお MOIS 塾という、各保護者が自身の仕事を生徒たちに伝える授業を毎年行っています。
いろいろな職業の方がいますが、うちの上の子は最初それで国連職員になりたいと言い出していました。
今はだいぶ変わってきましたが、そういうことを聞くといろいろな職業を知れますし、さまざまな職業に就けると思えるのかなと思っています。

――ちなみに今は何をやりたいと話されていますか。

保護者Ｃ　今はこの学校が好きすぎて、この学校の教員になるって言っています。

保護者Ｄ（4 年・女子）

――受検のきっかけを教えていただけますか。

保護者Ｄ　実は娘が小学校を卒業するまで、[redacted]に住んでいました。
娘が 6 年生の夏休み頃に偶然、インターネットを見ていたらこの学校のことを知り、教育理念がとても響きました。娘が英語が好きだったということもあるのですが、ひとまず彼女自身の目で見てから考えてみようということで、夏休みの最後のほうに学校見学に来ました。
校長先生のお話もとても上手でしたし、模擬授業を受けたらその先生の教え方がとても良く、楽しかったようで、合格したら引っ越してこようと受検を決めました。

――――無事、入学されていかがでしょうか？

娘だけでなく、私自身もこの学校が気に入っています。仕事をするようになって、従来型の暗記・詰め込み学習への限界を感じていました。働くようになると、自分の気の合う・合わないに関わらず、いろいろな方とつながって物事を進めていかなければなりません。

1．大宮国際中等教育学校インタビュー

この学校はグループで活動する場面がすごく多いのです。その中では楽しいこともちろんありますが、これはうまくいかなかったなとか、少し嫌なことを言われちゃったなという場面もきっとあると思うのです。その経験は将来、絶対に役に立つだろうということを感じています。

中学受検をくぐり抜けてきた子たちですから、MOIS には積極的な子や満遍ない勉強をできる子がたくさんいます。娘は小学校ではいい子な優等生でしたが、ここに入ってもっとできる子たちを目の当たりにして、おそらく自分は自身が考えていたよりできないといった悩みや葛藤と対峙しています。
でもクラスメイトたちが苦手な数学を教えてくれるらしいのです。ありがたいですね。お互いに協力しながら、自分自身の壁を乗り越えていく力をつけていってくれたらいいなと思います。

先生方はフラットであり、かつ優秀な方が多いような気がします。うちの娘は英語がすごく好きということもありこの学校を選びましたが、少し引っ込み思案なところがあります。校内で英語のディベート大会があるのですが、1～2 年生のときから本当は出たいと思っていましたが、自分からは手を挙げられなかったそうなのです。
しかし 3 年生のとき、直接教わっていない、英語科のトップの先生から「出てみない？」と声をかけていただいて出たんです。そうしたら「すごく楽しかった！」と、今年は自分で手を挙げられるようになりました。
担任や担当ではない先生もそうやって目をかけてくださっていることがとてもありがたく、感謝しています。

――保護者の方々のつながりも、とてもいいように見えます。

保護者 D　PTP（Parent-Teacher Party）といって、保護者による企画の仕事塾を開催したり、海外留学に興味があったり海外大学進学を検討する生徒向けの勉強会を行ったりと自由な活動をしています。
去年は、MOIS ができるまで 10 年以上の準備期間があったとお聞きしたことがあったので、関田校長先生をゲストに呼び、ご苦労やどんな試行錯誤があったのかなどを聞いてみたい思い、講演会をしていただきました。

そのほかにも保護者同士の親睦を深める交流会もあり、この学校の理念に賛同されている方が多いので、高い寛容性があり、皆さんから受け入れていただけている気がしています。

――大人のクラブ活動といった感じで楽しそうです。

保護者 D　本当にそうなんです。地元の小中学校とは違って、住んでいる地域が皆さんバラバラなので、PTP で集まったときに他の保護者の方と学校のことや学年の動き、子どものことを教えていただいたり、雑談などするという場面も多々あります。

1．大宮国際中等教育学校インタビュー

私は今年、自分から PTP の役員に立候補していますが、自らやりたいと思えるというのはすごく魅力です。PTA ではないので強制されないところがいいのです。

――お子様が MOIS で学ばれていることで、将来に役に立ちそうと感じることは何ですか？

保護者 D　先ほどもお話ししたグループ活動を通して、自分をどこまで出すとみんながどう反応してくれるのか、言われたことやされたことでどういう影響が出るのかということを、子どもはいま体当たりで学んでいます。
加えて、パワーポイントを使って発表するなど、人前で話す場面がとても多いので、度胸はついているのではないかと思います。
私が特に感心しているのが、授業参観の時に生徒たちに質問をすると、きちんと理路整然とした答えが返ってくるんです。

――さすがですね。生徒さんたちの意図を汲む力はすごいと思います。学校への要望はありますか？

保護者 D　仕方のないことですが、やはり中だるみはありますよね。
それでも娘と話していて印象的だったのが、例えば音楽の時間にある一人で歌唱のテストでも、MOIS の子たちは一生懸命歌うそうなのです。小学校の時や私自身が子どもの頃はわざと歌わないほうがかっこいいという雰囲気がありましたが、しっかり頑張ることはいいことだという意識が MOIS の生徒たちにあることがとてもうれしく感じました。

学校への要望ではありませんが、娘は今クラブアクティビティーに入っていないこともあり、体力がつくような機会があると安心です。部活を作ってほしいというわけではないですし、先生方はカリキュラムで手一杯なので、学校に求められることではありませんが、体力があるといろいろな場面で踏ん張りがききますし、受験勉強も、働いても体力は意外と使いますよね。メンタル面も運動することで鍛えられる場面があると思っています。

保護者 E（5 年生・男子）

――既存の学校の教育とこの学校の学びは大きく異なります。1 期生の保護者として、どんなことをお感じですか。

保護者 E　1 期生としては上の学年がいない分、学習面などはどうなるのかという不安の部分と新しい学校でという期待の両方が保護者としてもあったかなと思います。

この学びがどのように役立つかというところも含めて、課題解決型の探究学習というのは大きな特徴だと感じています。

1．大宮国際中等教育学校インタビュー

一人で取り組むだけでなくて、グループや同じ探究課題を持つ者同士で取り組んだりしているので、協働する力も培われているのかなというのは５年生になって特に感じます。
１年生のときは課題への取り組み方だったり、長期スパンで時間をどのように使って課題に向き合うのかということは悩んでいましたし、時間配分についても難しかったのかなと思います。

５年生になって大学見学をしたり、さまざまな授業経験を積んできたなかで、やはり探究学習というのは今後につながるものであり、自信を持っていいのだという言葉を本人から聞きました。
要するにMOISでの探究は大学での学びに近いというか、主体性を持って深めていくというところで、大学進学への不安は軽くなったし、今やっているような学びで自分の力を発揮できるのだと感じたようです。ですのでこの学習は、今後に活かされていくのだろうと思っています。内容については私はノータッチで、どんな形で何をやっているかは本人に任せています。

――総合型入試を見通されているのですか？

保護者Ｅ　どの大学に行きたいということもまだ定まっていないので何とも言えませんし、一般入試を考えてるようですが、MOISの学びでも自分にきっちり力がついているということを自覚できたそうです。

英語教育に力を入れているので、親としては国際方面に進むのかなという期待もあったのですが、５年生はコロナ禍で２年生で行くはずだった［　　］は行けていません。それでも１年生で［　］にある［　　］での体験だったり、５年生で行ったフィールドワークなどで、世界のほうに視野が向いたのかなということは感じています。

そこはどう活かされるかは本人次第なので（笑）。ただ、見るだけでも、体験するだけでも違うのかな、というのは思っています。

――中学受検時はどうされましたか？

保護者Ｅ　MOISと［　］の両方を受けました。一次ではどちらも受かりましたが、二次試験は同じ日だったので、MOISを受検しました。

――MOISにした決め手は何でしたか？

保護者Ｅ　これは私の考えですが、二次試験は［　］は１対１の面接で、こちらはグループディスカッションでした。息子としてはディスカッションのほうが力を発揮できるかなと感じたところと１期生で新しいところで頑張れるかなという思いもありました。

1．大宮国際中等教育学校インタビュー

――中高一貫校というのは６年間の学びの中で継続性があると思うのですが、そこでの魅力や良かったと思う部分はありますか?

保護者Ｅ　中だるみもありますし、友だちはずっと１学年 160 人ということで、そういう中で気持ちをそのまま継続していくのは、子どもたちにとってどうなのかなという思いはあります。
友だち関係で辞めるという方はいませんでしたが、学習面でついていけないというか苦手と思われた方が学年で 10 人ほど辞めています。

息子はクラブアクティビティで [redacted] をやっています。３期で分かれているので、いつ辞めてもいいのですが、１年生から継続してずっと一緒に続けている仲間がいます。とてもいい関係性ができているのかなと感じています。

クラブアクティビティは、１回休んでも戻って来られる柔軟性があるのはとてもいいことだと思います。ただその一方で継続はできないので、強くなるためのクラブではないという感じですね。継続はできないのでもう辞める方もいて、良し悪しもあるのかなとは思います。

[redacted] 部は、強さを求めたことがありました。ただ、夏休みの活動もできないという校則だったので、親と子どもとで学校に掛け合って、試合の前だけでも週に３回の活動を交渉するなど、少しずつですがアクションを起こしている感じです。

――お母さまは１年生の時から PTP の活動を継続してやられているのですか?

保護者Ｅ　新しいものを１から作るという体験が楽しいと思っていて、しかも任意で強制でないという気楽さがあります。私も仕事をしていますが、土曜日が活動日ということなので、比較的参加しやすかったんです。仕事などで都合が悪かったら、じゃあごめんねと軽く言えるというところも良くて続けられています。

IB 校なので、評価や学習内容の概念が一般的なものと違うというところで保護者もはじめはすごく戸惑っていました。毎回評価前には、保護者向けに評価基準について説明をしていただけましたし、数学の授業を英語でやる体験などもあり、そういう細かな配慮をしてくださったので、徐々に不安を払拭できたと感じています。

――親御さん向けのイマージョン教育の授業があったということですか？

保護者Ｅ　１年生のときに、どういう授業をしているのか保護者もわからないという声がたくさん上がっていました。そういう声を拾って学校と協力してやってみようと企画しました。
本当に簡単な足し算などですが、イマージョンで体験できたことによって具体的に理解できたという反応をたくさんいただきました。

1．大宮国際中等教育学校インタビュー

――普通の学校だと PTA をやらないようにみんな避けていきますが、PTP を皆さんが積極的にやりたいと思う理由にはどんなことがあるのでしょうか？

保護者Ｅ　まだ５年目ですし、実際にはコロナ禍が明けてから本格的に始動しているのでまだ模索している状態ですが、数人でも立ち上げれば参加してくれる方が多くいます。保護者の交流だったり勉強の場だったりするので、会員になっていただければ楽しく参加できるような形にはしていきたいと思っています。

保護者Ｆ（5 年生・女子）

――受験されたのは、公立中高一貫校だけですか?

保護者Ｆ　そうですね。最初は私立中高一貫校の受験も考えていましたが、学力や本人の志向性といったところで、公立のほうが合ってそうだと切り替えて、MOIS と [redacted] を併願しました。

――MOIS に決めた理由は何でしたか？

保護者Ｆ　グローバル教育には、やはり惹かれました。海外に行けるチャンスがあるというのは本人的にも魅力的でしたし、親としても英語力が身につくというのはいいことだと思いました。

――お父様から見て、この学校の魅力というのはどのようなところですか？

保護者Ｆ　公立にしては自由だと思います。子どもたちからしたら、校則や制服などうるさく感じるところもたぶんあるんでしょうけど、例えば、うちの子は途中で [redacted] へ留学をしたのですが、手続きは後回しでいいから、頑張っていってらっしゃいと応援くださる姿勢を感じました。これは他の学校にはない魅力だなと感じます。

――途中で留学というのはいつ頃どれくらいの期間行かれたのですか?

保護者Ｆ　３年生の１月から４年生の６月までの半年間行っていました。

――もともと、お嬢さんは留学の希望をお持ちでしたか?

保護者Ｆ　この学校に入る前は特別な英語の勉強もしていませんでしたし、そういう思考は全然ありませんでした。しかし、２年生の時に [redacted] に行ける予定でしたが、コロナの影響でそれが中止になっ

てしまったことで、本人が「ちょっと行きたかった」と言ったんです。これはチャンスだと思って、私のほうで行かせる算段を整えて送り出したという感じです。

――学校との交渉もお父様のほうで?

保護者Ｆ　基本的には自分でほぼやりましたが、交渉みたいなことはほとんどなくて。留学者の１号か２号だったので、まだルールもほとんど決まっていませんでした。

――半年間留学に行かれて戻ってきたお嬢さんの成長ぶりはいかがでしたか？

保護者Ｆ　親からの目から見ると、大きな成長はあまり感じませんでしたが、やはり強さやたくましさはついたような気がします。
中学生で半年間も異国で一人でホームステイをしてというのは、どんなところに行ってもやっていけるという自信につながっていると感じます。

――いきなり半年はかなりタフな経験ですよね。

保護者Ｆ　そうですね。ほぼ初海外だったので。

――英語はかなり得意だったんですか？

保護者Ｆ　いや、小学校の時は全然勉強しなかったですし、この学校に入ってから学び出したくらいです。

――それは本当に度胸がつきますし、お嬢さんを送り出したお父様もすごいですね。

保護者Ｆ　本人が言ったことに乗っただけで、私は背中を押しただけなんです。[redacted]だったら治安もそれほどは心配なかったので。

――半年留学されていざ学校に戻って来られた時のことをお嬢さんから聞いていましたか。

保護者Ｆ　その時には何人か留学している子が出始めていたり、戻っている子もいたりというタイミングだったので普通に学校生活に戻っていったかなと思います。一週間くらいは時差ボケなどで苦労していた印象はありましたが。

――そういった自由さや主体的に自分で選び取っていくことが求められる校風だと思いますが、お嬢さんの将来にどんなところが役に立ちそうだとか、役に立ててほしいというところはありますか？

1．大宮国際中等教育学校インタビュー

保護者Ｆ　本人自身も海外大学に行きたいと言っていて、どんなところに行ってもやっていける、大丈夫そうと思えるというのは、いつの時代にも役に立つだろうと思っています。

キーボードを打つところから始めて、パワポなどパソコンの扱いにも慣れていき、勉強をしているのか、もしかしたら仕事をしているのでは？と思ってしまうくらいの背中を見ていて、プレゼンもとにかくたくさんやらされますし、それはやっぱり社会で即戦力として役に立つんだろうなと思います。

――今は企業もなかなか一から育てる、ということができない時代なので、企業側としてもありがたいですね。大学については、海外大学をご希望とのことですが。

保護者Ｆ　本人の希望としては、□ の大学に行きたいと言っています。
私自身も経験がないので手探りですが、いろいろ一緒に考えながら進めようとしているところです。

――DP であれば、かなり背中を押される、という部分としては大きいですよね。

保護者Ｆ　そうですね。

――6 年間ならではの中高一貫校の中で、学べた部分や成長を感じたことはありますか?

保護者Ｆ　留学したのが、一般的には中学から高校に上がるタイミングだったので、普通は行けない時期だと思います。そういうこともあり、向こうに行ってもいちばん年下だったと聞いています。それは大きな自信と経験につながったと思います。

高校受験がなかった分、詰め込み教育を全然やらずにここまで来ていて、それはいいところと悪いところがあるとは思いますが、本人的には物事の背景などを考える癖もつき、特化した人間に育っていると、この５年間の成長を見ていて感じます。

――尖った人材ですね。

保護者Ｆ　かなり尖っていると思います（笑）。英語力やグローバルへの意識、あとは人と協働するという部分やパソコンのスキルなどは尖っていますが、例えば歴史の年代を覚えるとか、普通に教育を受けている人が持っているであろう基礎知識といったものがあまり身についていなくて、それはそれでどうなんだろうと思うところはあります。まぁそれも面白いかなと思って見ています。

――AI の時代ですしね。場合によって、大学は必要なさそうな可能性もありますね。だからこそ、中高では何を学ぶのかという視点も大切ですね。

保護者Ｆ　そうですね。うちの子の場合は、これがやりたいということを強く持っているタイプではありません。この６年間の中でやりたいことや志を見つけていかなければ難しいのかなとも思っています。やりたいことが見つかると、彼らが持っているこのスキルと組み合わさって、さらに尖がった人材になっていくのだろうというのは、周りのお子さんの話を聞いていても感じる部分です。

――学校に対して、もう少しこうしてほしかった部分はありますか？

保護者Ｆ　個人的には校則はもう少し自由で、もっとオープンでもいいのではと思います。もちろんいろいろな保護者の方のご意見もあるとは思いますが。
これだけ外の大人などとも接する機会が多く、いろいろな経験ができる学校はあまりないと思うので、それこそ海外の学校くらい自由でもいいのかなと感じています。

ただ高校生らしさといった部分は残っているほうが便利な場合もありますし、社会的な信用は得られると思うので、そのあたりは良し悪しですね。

――――――　インタビュー終了　――――――

第２章 大宮国際中等教育学校の教育について

大宮国際中等教育学校は、埼玉県さいたま市に位置する公立の中高一貫校です。様々な学びの中で課題に向き合い、失敗を恐れず立ち向かい、未知や想定外に出会っても驚かず、自ら新しい価値を創って楽しむ場面を設定 しています。また、学校の学びが社会に近づけるよう、外部の人や社会と多くつながり、将来、実社会で役立つ経験を積み重ねた教育活動を, 展開しています。

そして、それらの学びを通して Grit(やり抜く力)、Growth(成長し続ける力)、Global(世界に視野を広げる力)の３つの G を６年間通してバランスよく身に付けることが できま す。また、「生涯にわたって自ら学び続ける力」や「自分の頭で考え抜き、新しい価値を生み出す力」など、国際的な視野に立って多様性を理解 して探究し続ける「真の学力」を６ 年間の連続性の中で育んでいきます。

【目指す学習者像】

未来の学力が備わった人

自ら課題を設定し、解決するために、自ら計画を立てて、リサーチやディスカッションを行ったり、表現したりする力を身に付けている。

国際的な視野を持った人

世界の人たちとコミュニケーションをとることができ、地球上のいろいろな場所で活躍できるような新しい発想を身に付けている。

より良い世界を築くことに貢献する人

積極的に他者とともに学び、教え合う活動やボランティア活動を通して、他者への寛容性と協力する態度を身に付けている。

【探究学習と ICT 活用】

探究学習では、調査・探究・振り返りのサイクルをあらゆる場面で行います。ICT によって生徒の学習を支え、アクティブラーニングを実践します。

生徒に１人１台の校内持ち歩き自由の PC を配付し、授業や様々な場面で活用します。また、全クラス・特別教室に設置された電子黒板機能付きプロジェクターを利用して、どこでも発表が可能です。

さらに、オンライン上で成果物の提出を行ったり、チャット機能を使って意見交換をしたり、動画配信をしたりするなど、個人のポートフォリオをデータで蓄積して大学受験までの６年間をサポートします。また、「Classi」では、自分の１日の 活動を振り返り、メタ認知機能を強化するとともに、教員と生徒、生徒同士のやり取りで、人とのつながりを大切にして、個人の学びをサポートします。

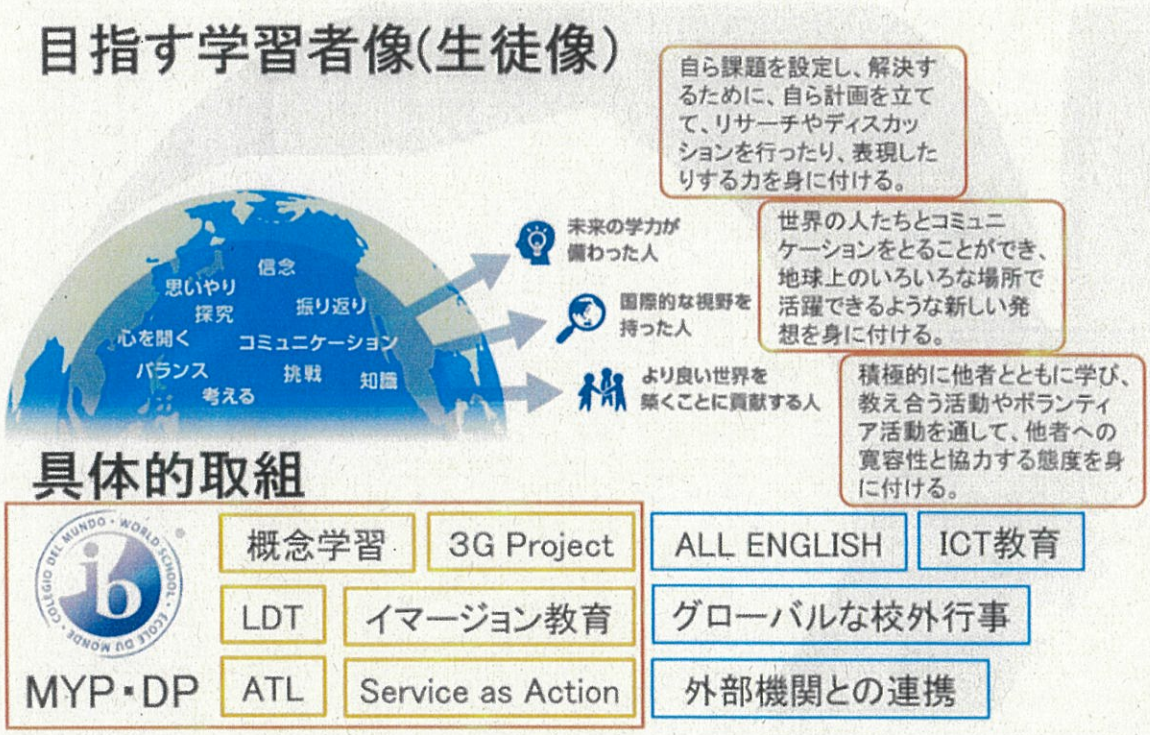
「Microsoft Teams 」や「 Zoom Meetings 」を用いることで、生徒の学びが止まることのないようにしています。また、「スタディサプリ」で学習状況に応じた課題を配信することで、個別最適化された学びの場を提供しています。多様な ニーズに沿って対話を深め、広範囲にわたる外部と繋がる活動を目的とし

て ICT を活用することで、探究活動を効果的かつスムーズに行い、世界に貢献する生徒の育成を目指します。

【グローバルな視点を育む校外行事　】～ 連続した体験活動の学び～
大宮国際中等教育学校は校外学習も「Global」です。外国での体験活動では、異文化・同年代の人たちとコミュニケーションを図り、協力して課題解決に取り組みます。

（一年）ブリティッシュヒルズ
（三年）ニュージーランド語学研修
（四年）東北方面国内修学旅行
（五年）海外フィールドワーク

【授業外での様々な活動】
・Service as Action　・MOIS Shop　・MOIS Cup
・MOIS 仕事塾　・MOSI Mock Trial　・English Gym



3. IB 国際バカロレアについて

第３章 IB 国際バカロレアプログラムについて

国際バカロレア（IB）プログラムは、国際的な教育課程であり、文部科学省もこのプログラムを推奨しています。国際バカロレア機構が提供するこのプログラムは、世界中の学校で実施されており、日本国内でも多くのインターナショナルスクールや一部の公立・私立学校で導入されています。

このプログラムは、国際的な視点と批判的思考を育成することを目的としています。IB プログラムには主に三つのプログラムがあります。

プライマリ・イヤーズ・プログラム（PYP）
3 歳から 12 歳までの子ども向けのプログラムで、探究心を育て、国際的な意識を養います。

ミドル・イヤーズ・プログラム（MYP）
11 歳から 16 歳までの生徒向けで、総合的な学習を通じて批判的思考力や問題解決能力を養います。

ディプロマ・プログラム（DP）
16 歳から 19 歳の生徒向けで、大学進学を見据えた高度な学術的教育を提供します。このプログラムを修了すると、IB ディプロマが授与され、世界中の多くの大学で入学資格として認められています。

日本においても、IB プログラムは教育の国際化と学生の国際競争力を高める手段として注目されており、文部科学省はこれを積極的にサポートしています。IB プログラムを導入することにより、生徒たちは多文化理解、言語の習得、独立した学習スキルなどを身につけることができます。これらの能力は、グローバル化が進む現代社会において非常に重要です。

IB ディプロマは国際的な認知度が高く、世界中のほとんどの大学で先進の教育資格として認められています。これにより、卒業生は留学や国際的なキャリアの道を歩みやすくなります。また、IB プログラムでは多言語能力と多文化理解の重要性を強調し、生徒が異文化間の架け橋となり得るよう教育します。

IB 教育を導入することは、国際的な競争力を備えた若者を育成し、地域の教育水準を高める手段となります。地域に開かれた IB ワールドスクールを設置することは、社会に対して教育への積極的な投資となり、持続可能な発展と地域社会の多様性を促進する効果が期待できます。

②我が国におけるIB推進の意義と位置づけ

IB推進の意義

①グローバル人材育成

✓幅広い知識の**探究スキル**、**課題発見・解決能力**、**コミュニケーション能力**等を育成

✓国際的な視野を持ち、将来の社会課題に対応するグローバル人材を育成

（参考）IB生の授業風景
@市立札幌開成中等教育学校

②初等中等教育の質の向上

✓新学習指導要領に示されている「主体的・対話的で深い学び」等、**IBと日本の教育政策との高い親和性**

✓**主体的な学び**を通じた全人教育により、初等中等教育の好事例を形成

③国際的通用性

✓IB資格を活用した**国内外への進路の多様化**（DPのスコアを海外大学の受験に活用可能（学力試験の免除等）となる等）

✓国内大学でのIB入試導入により、海外のIB生を呼び込み、国内の**大学の国際化・活性化**

成長戦略2021　令和３年６月18日　閣議決定

【工程表】

国際バカロレアに関し、国内の普及体制（コンソーシアム）を通じ、デュアルランゲージ・ディプロマ・プログラム（日本語DP)の導入促進、大学入試における国際バカロレアの活用促進、国際バカロレア導入に向けた環境整備（教育課程の特例措置、教員の養成・確保等）等を推進

・国際バカロレア認定校等を2022年度までに200校以上

新しい資本主義のグランドデザイン及び実行計画　令和４年６月７日　閣議決定

【フォローアップ】

・2022 年度末までに国際バカロレア認定校等を 200 校以上にするため、相談対応や広報を行うとともに、大学での国際バカロレアの活用促進のための方策について検討し、2022 年度中に結論を得る。

【国際バカロレア（IB）の学習者像】

すべてのＩＢプログラムは、国際的な視野をもつ人間の育成を目指しています。人類に共通する人間らしさと地球を共に守る責任を認識し、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する人間を育てます。

探究する人

私たちは、好奇心を育み、探究し研究するスキルを身につけます。ひとりで学んだり、他の人々と共に学んだりします。熱意をもって学び、学ぶ喜びを生涯を通じてもち続けます。

知識のある人

私たちは、概念的な理解を深めて活用し、幅広い分野の知識を探究します。地域社会やグローバル社会における重要な課題や考えに取り組みます。

考える人

私たちは、複雑な問題を分析し、責任ある行動をとるために、批判的かつ創造的に考えるスキルを活用します。率先して理性的で倫理的な判断を下します。

3. IB 国際バカロレアについて

コミュニケーションができる人
私たちは、複数の言語やさまざまな方法を用いて、自信をもって創造的に自分自身を表現します。他の人々や他の集団のものの見方に注意深く耳を傾け、効果的に協力し合います。

信念をもつ人
私たちは、誠実かつ正直に、公正な考えと強い正義感をもって行動します。そして、あらゆる人々がもつ尊厳と権利を尊重して行動します。私たちは、自分自身の行動とそれに伴う結果に責任をもちます。

心を開く人
私たちは、自己の文化と個人的な経験の真価を正しく受け止めると同時に、他の人々の価値観や伝統の真価もまた正しく受け止めます。多様な視点を求め、価値を見いだし、その経験を糧に成長しようと努めます。

思いやりのある人
私たちは、思いやりと共感、そして尊重の精神を示します。人の役に立ち、他の人々の生活や私たちを取り巻く世界を良くするために行動します。

挑戦する人
私たちは、不確実な事態に対し、熟慮と決断力をもって向き合います。ひとりで、または協力して新しい考えや方法を探究します。挑戦と変化に機知に富んだ方法で快活に取り組みます。

バランスのとれた人
私たちは、自分自身や他の人々の幸福にとって、私たちの生を構成する知性、身体、心のバランスをとることが大切だと理解しています。また、私たちが他の人々や、私たちが住むこの世界と相互に依存していることを認識しています。

振り返りができる人
私たちは、世界について、そして自分の考えや経験について、深く考察します。自分自身の学びと成長を促すため、自分の長所と短所を理解するよう努めます。

これらの学習者像は、単に学術的な能力を超え、個人の成長と社会への貢献を重視する IB の教育哲学を反映しています。文部科学省は、このような特性の育成を通じて、生徒たちが国際的な視野を持ち、多様性を尊重し、世界で活躍できる人材に成長することを支援することに重点を置いています

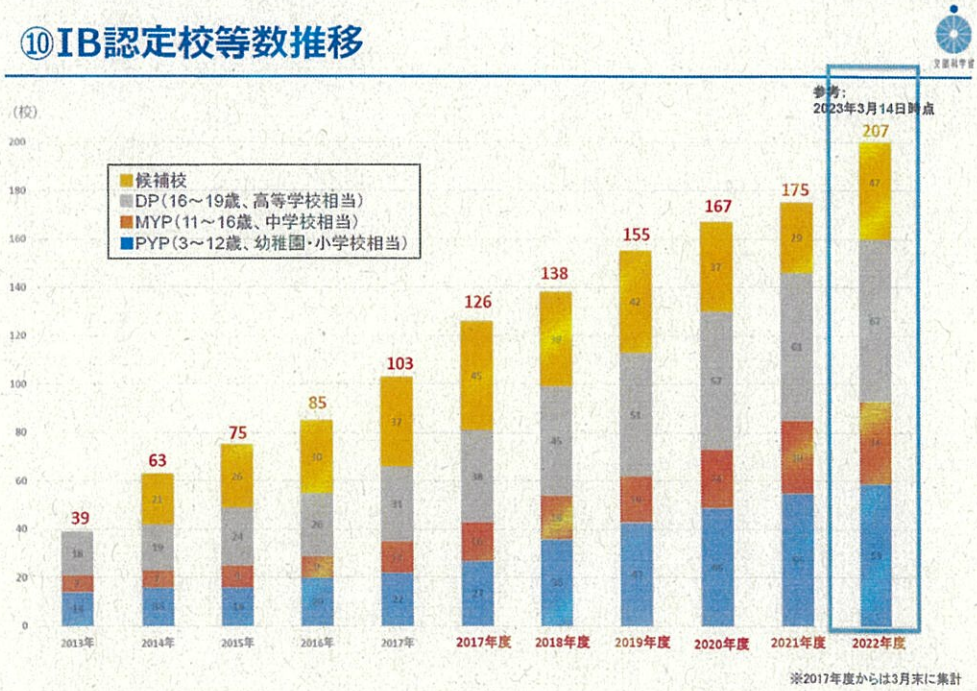
3. IB 国際バカロレアについて

【兵庫県内の国際バカロレアを導入する学校】
次に神戸市に一番近い兵庫県内の国際バカロレアを導入する学校を紹介しておきます。

◎AIE 国際高等学校
AIE 国際高等学校は、兵庫県淡路市に位置する、日本で唯一の通信制高校として国際バカロレア・ディプロマプログラム（IBDP）を実施している教育機関です。この学校は、兵庫県立洲本実業高等学校東浦校の跡地に 2013 年に開校し、2017 年に IB ワールドスクールとして認定されました。

通学コース、レジデンスコース（学生寮）、オンラインコースを用意しており、生徒のライフスタイルや学習ニーズに合わせた学習方法を選択できます。特にオンラインコースでは、双方向型授業や英語力向上のための特別プログラムが提供されています。
グローバルな視野を持ち、国際社会で活躍することが期待される人材を育成することを目指しています。IB プログラムの導入により、生徒たちは国際的な教育環境の中で学び、世界で活躍するための基盤を築くことができます。

探究型学習を基軸とした世界標準の IB ディプロマ・プログラム（DP）を提供しています。このプログラムを通じて、生徒は主体的な学習により、批判的思考力や独立した学習能力を身につけることができます。
少人数制のアクティブラーニングを採用し、聞く力と表現する力、思考力と語学力の向上を図っています。特に英語教育に力を入れており、ネイティブ・スピーカーとの交流や夏期体験留学プログラムを通じて、生徒たちの「伝える力」を強化しています。
米国ワシントン州のセントマーチンズ大学と共同で約 2 週間のアメリカ文化体験プログラムを実施しています。このプログラムは、生徒に国際的な視野と実践的な英語使用の機会を提供します。
IB ディプロマプログラムの修了者は、海外の大学進学へのルートが確保されるだけでなく、国内英語系大学への進学実績も多数あります。生徒たちは、国際的な教育背景を活かして幅広い進路選択が可能になります。



第４章 在校生・保護者・先生のアンケート結果

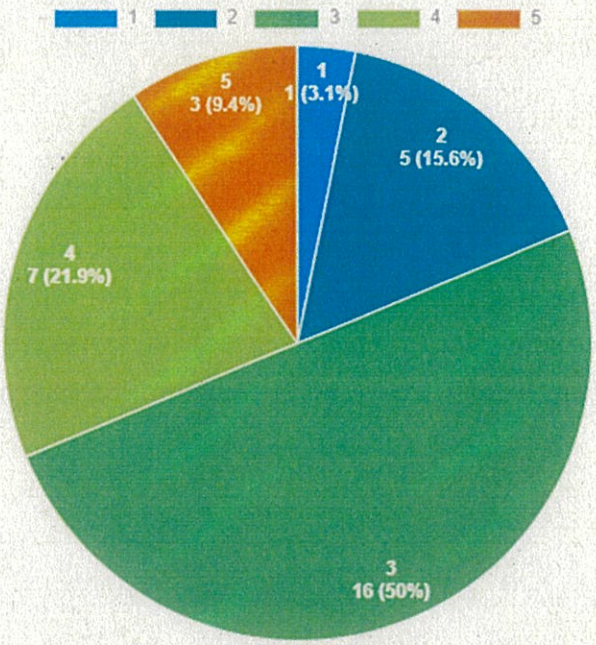
次の資料は大宮国際中等教育学校の先生へのアンケート調査です。

国際バカロレアプログラムを導入した学校の先生がどのように感じているのが確認しておきたいと思います。

【先生アンケートより】

★この学校の教育レベルは、私立の中高一貫校のトップレベルの学校と比較して優れていると思いますか？

５とても優れている
４とても優れている
３どちらでもない
２劣っている
１とても劣っている



【先生】

○どのような教育を目指すか、またどのような生徒を育てたいかという方向性にはさまざまあり、どれが正解か、どれが優れているかということは言えない。しかし、６年間一貫した教育を行うにあたっては、自らの示す教育の方向性が魅力あるもの、優れたものであるという自信をもって発信するものだと考えている。

○「教育レベル」という言葉が難関校への合格実績と同義であれば、優れていないということになる。しかし、社会に出たときに役に立つという意味であれば、本校の社会と積極的に関わり社会の変革に参画することを奨励する教育は間違いなく優れていると言える。

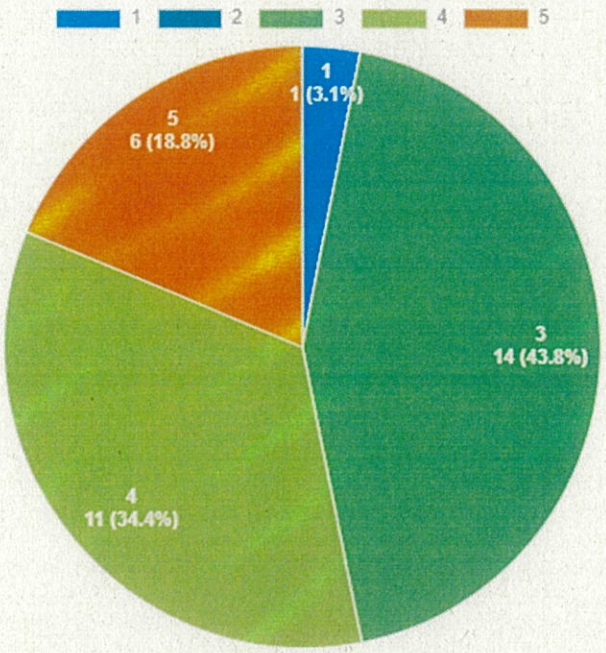
○生徒自身に考えさせる教育という点では優れていると思う。

○新課程に変わってから全国の模試結果では「思考力」には課題があると言う傾向があると言われています。しかし、本校では、あんまり勉強していない「古典」でも、思考力は身についているという結果が見られている。

○僕は開成で教えていたから、開成じゃないけど、この学校には生徒を後押しするすごい力があると思う。

【先生アンケートより】
★国際バカロレアプログラムは、
今までの日本の教育と比較して優れていると思いますか？

５とても優れている
４とても優れている
３どちらでもない
２劣っている
１とても劣っている



【先生】

○現在の学習指導要領が目指しているものの一つの形がIB教育であるので、もちろん今までの日本の教育と比較して優れている。

○日本の教育実践の中でも優れたものは非常に多くあるので、どちらの方が優れているということではないと思う。
ただし、世界の先端理論を取り入れている点や満たすべき点が厳格に定められているという点などでは、教育の質を担保するという点で優れていると感じる。（日本は優れたものがたくさんある一方で、質的に低いと言わざるを得ない点も多くあるように感じる。）

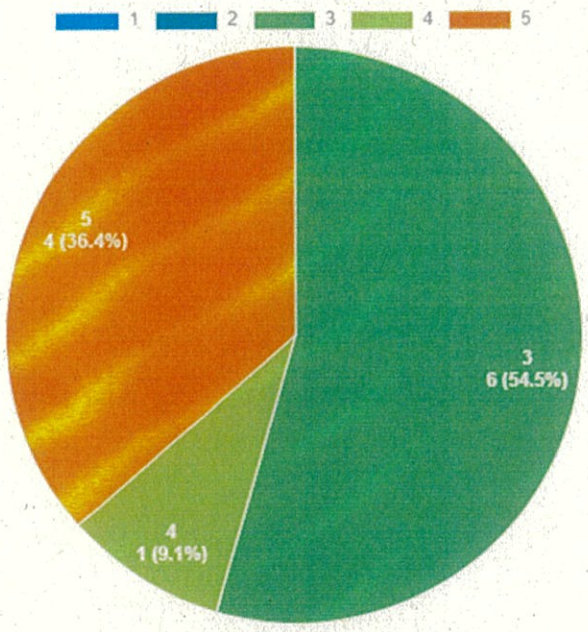
○国際バカロレアだから優れているということはありません。今までの日本の教育にも良さがありますし、国際バカロレアと日本の教育は似ている部分も多くあります。先生方の意識とアプローチの仕方によって教育は変化するものですから、国際バカロレアプログラムは器にすぎません。

○知識を覚えることにとらわれることなく、科目をつなげ、世界を理解しようとしているためです。日本の教育は、今まで知識を分かりやすく教えることに労力を割いてきました。国際バカロレアは、知識がどのように世界に存在しているか、事象がどのようにつながっているかを理解することに焦点をあてています。日本に無かった、有益なプログラムだと思います。

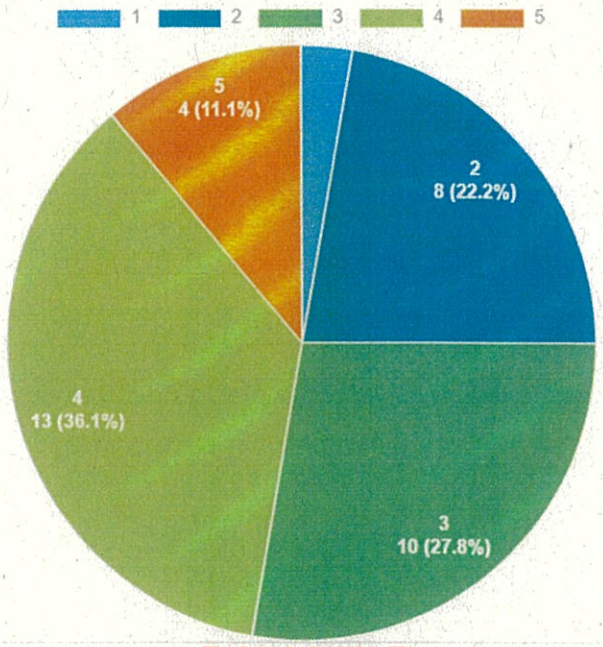
○IBワークショップに参加して、IB教育の面白さを感じた。これからの社会を生き抜いていく上では意味のある教育だと考えている。ただし、従来の日本の教育を受けてそれを教えてきた、公立学校採用の教員が、IB教育を進めていけるかどうかは別の問題。IB教育に興味があり、学んでいく教員でないと、IB教育を提供できないと思う。

【先生アンケートより】
★これから受検を考えている小学生にこの学校を薦めますか？

５強く薦める
４薦める
３どちらでもない
２薦めない
１強く薦めない



【保護者】



【在校生】

※前頁のアンケートのコメント

【保護者】
〇我が子は課題の多さに心が折れそうになっている事もあるが、私自身が大宮国際に通いたかったと思う程、魅力的なカリキュラムが多い。

・大学受験が目的になる中高一貫校よりも社会でどう生きるかという事に主眼を置いているところが個人的には素晴らしいと思う。

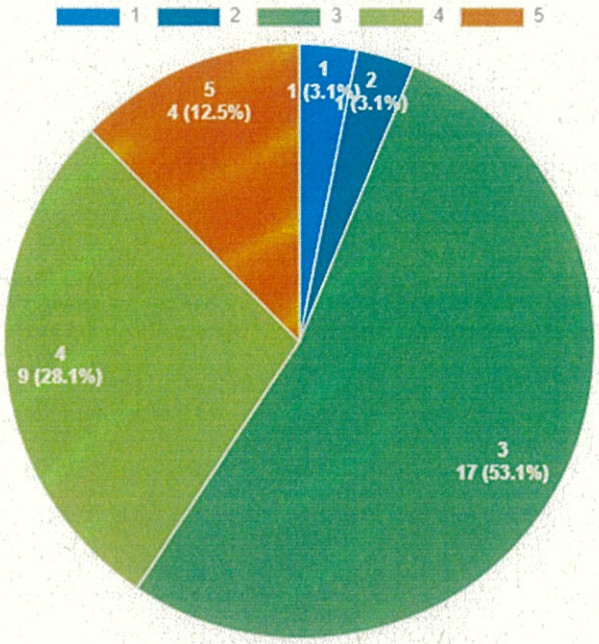
【在校生】
〇中高一貫校では、長い期間を通して精密なカリキュラムをこなし、生徒はのびのびと過ごすことができます。また、大宮国際の場合は英語ですが、一つの強みを作り、それを伸ばしていくことも可能です。小学生には中学生からのびのび自分のやりたいことをやってほしいと思います。

〇小学生の人の将来の目的によると思う。MOIS は英語やスピーチ、論文などを多く学べますが、国内の受験勉強に特化したような学校ではないため、国内大学の受験勉強だけを見据えるならお勧めしないです。

〇軽い気持ちで受けてはいけないと思います。一般入試で大学を受験したいのなら他の学校の方が経験値は高い上に共通テスト対策も充実しています。ですが、探究型の学習や IB を通して総合型選抜を目指すならおすすめします。

★まだ公立中高一貫のない自治体に
公立中高一貫校の開校を薦めますか？

５強く薦める
４薦める
３どちらでもない
２薦めない
１強く薦めない



【先生】

〇生徒が選べる学習環境が多様であることは重要だと思う。

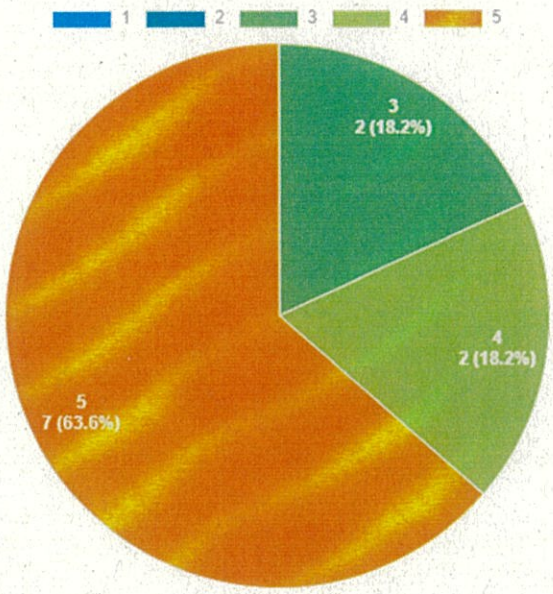
〇しっかりとした目的があれば開校をするのも良いと思います。しかし多くの場合保護者や生徒のニーズは難関校合格のような気がします。その場合は一貫である必要はあまり感じられません。学ユニークな取組を行う学校として一貫校を開校するのあれば、難関大学を目指す学校と一線を画す個性が必要だと思います。

〇何を中高一貫校に求めるか、だと思います。中高一貫校では、高校受験にとらわれずに学びを深められる分、保護者からは大学受験に対してコミットすることを求められる場面が多いです。建学理念として、大学受験にとらわれないことを謳い、学びにフォーカスするのであれば、開校する意味はあると思います。

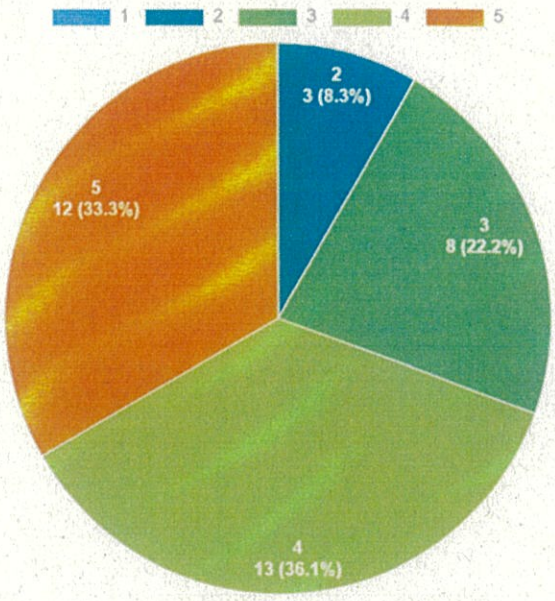
〇これも一貫校と非一貫校のどちらの方が良いということではないが、そういう学校が自治体にあることでこれまでの中学校／高等学校それぞれの取組や学校種ごとの文化を相対化し、見直すきっかけになるのではないかと思う。
実際に、他校種の先生と一緒に仕事をすることが発見や学びは非常に多いと感じている。

★通常の公立中学校ではなく公立中高一貫校に
進学して良かったですか？

５すごく良かった
４良かった
３どちらでもない
２良くなかった
１すごく良くなかった



【保護者】



【在校生】

※前頁のアンケートのコメント

【保護者】
○高校入試がない。学費も安い。

○授業料がお得。また、中高と制服やジャージ等が同じであることも助かった。

○合わないお子さんもいると思うし、かなり個人的な意見になるが、
受検を乗り越えて入学しているご家庭のお子さんなので、通常の公立中学校より落ち着いて学校生活を送れるお子さんが多いと思う。
　お友達も穏やかで自主的に課題や勉強を進める子ばかりで、そういった環境にいれる事がありがたい。

○大宮国際中等教育学校は、進学校とは言えないのは確かですが、全体的に学力は高いと思います。受験のための学習ではなく、本来の学ぶと言う事を教えてもらえてるように思います。

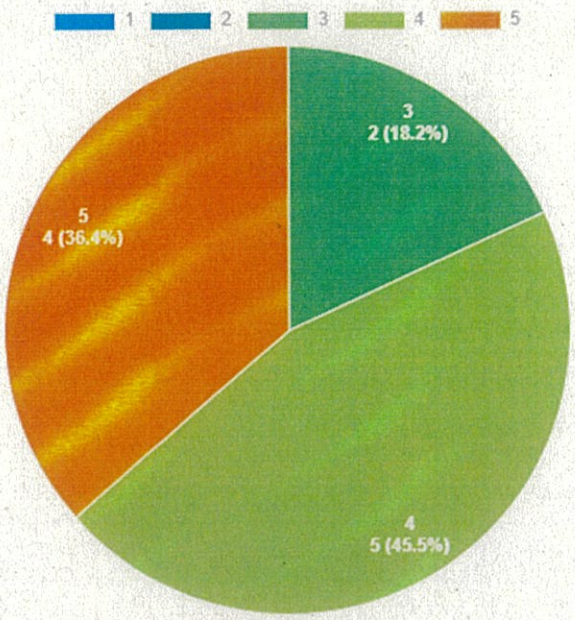
【在校生】
○同じ友達と６年間一緒にいれることで、強い絆が生まれる。高校受験がないので、中学生と高校生を、勉強以外の面でも楽しむことができる。

○高校受験に向けた勉強をしないので中３から高１の間で中だるみが起きてしまう。しかし、受験を気にせず中学生の間を使って課外活動や様々な経験をすることができる。

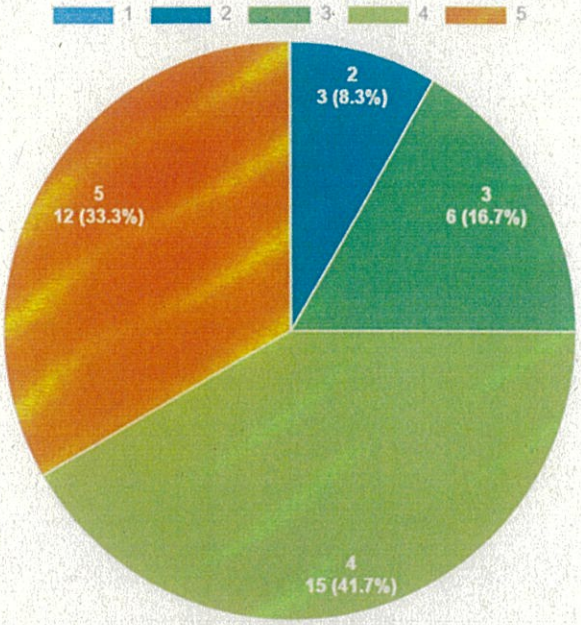
○中高一貫校のため高校受験へ向けて中学三年生で勉強する必要がありません。なので中学三年生の時にじぶんの将来やりたいことを見つけることにつながる経験や学びをするじかんが受験に向けて勉強するときに比べ多いのでそれが将来につながっていいと思いました。しかし中だるみをしてしまうと意味がないので気を付ける必要があります。

○中高一貫校には、中だるみがあるということはよく言われると思いますが、それは一部正解で一部不正解であると思います。その理由は、６年もあるからいいや、となってしまうのは事実ですが、探究活動を通して「自分のやりたいこと」を追求することは中だるみではないと思うからです。中高一貫校のよい部分を私は行かせていると思っています。

★通常の中学３年間と高校３年間の学校と比べて、６年間・中高一貫教育による利点を感じていますか？
５利点をすごく感じる
４利点を感じる
３どちらでもない
２利点を感じない
１利点をほとんど感じない



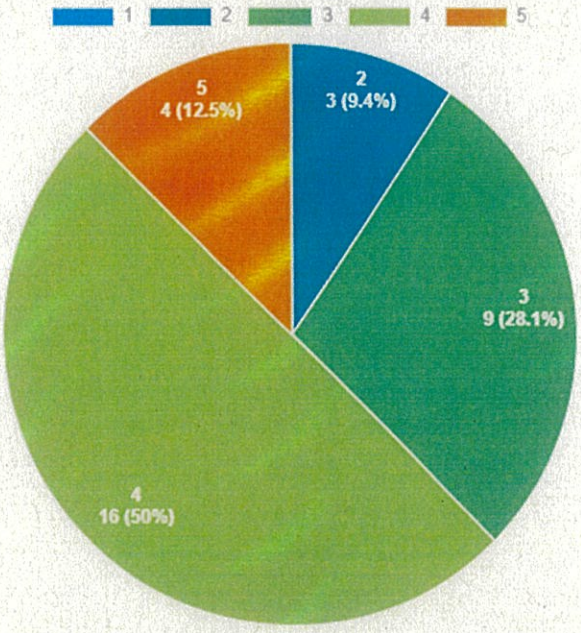
【保護者】



【在校生】

★通常の中学３年間と高校３年間の学校と比べて、
６年間・中高一貫教育による利点を感じていますか？

５利点をすごく感じる
４利点を感じる
３どちらでもない
２利点を感じない
１利点をほとんど感じない



【先生】

※前頁のアンケートのコメント

【保護者】
○高校受験がないので、探求活動やクラブ活動もできる。

○私自身も中学校から附属の学校で友達との絆がとても強いと感じている。
　我が子もお友達と中高とより長く仲良く過ごせる事で心が安定していると思うので、この先社会に出て荒波に揉まれても絆が強いお友達がいる事が財産になると思う。

○友達と６年間一緒に過ごせる点が利点だと思う。

○高校受験が無いため、その期間をのびのび過ごすことができた。特に、運動系の部活をしていたので、活動が中断されないことが良かった。

○高校の受験が無い事が一概に良いとは言えませんが、環境を変えずに一貫した教育を受ける事にメリットが多々あります。

【在校生】
○同じメンバーで６年間やっていくというのは小学校の六年間と同じで長い期間なので人や先生との関係性を築くために時間がゆったりとあるのでその点はよいと思います。

○色々な人と仲を深められるといういい点があるけれど、高校受験が無い分やはり気が緩んでしまうときがありました。

○先生方も自分のことを小さいころから知っている人が多いので、自分の性格なども踏まえたうえで指導してくれる。６年間だからこそ、深い学びができている気がする。

○中学生の時に見つけた興味を高校生でも続けて探究することができる。一貫校っであると環境が変わらず深い探究が続けやすいと思う。

○数 1A の内容の一部を３年生で行うなど、授業を変えることで大学受験に向けての対策ができていると思う。

【先生】

〇高校受験がないぶん、自分の興味について時間をかけて探究したり大学受験を前提にした指導ではなく将来のビジョンを前提にした指導ができる。

〇高校入試という出口に縛られずに多様で柔軟なカリキュラム編成ができる点は大きな利点であると感じる。 一方で、中学／高等学校という節目がないため、メリハリをつけづらいという点や、高入生がいないことによる人間関係の固定化等は中高一貫教育のマイナス面であるのではないかと思う。

〇通常の中学校の生徒が現在の知識偏重型の入試対策を行う代わりに、本校の生徒は興味を持っていることについて探究を深めることができるため。

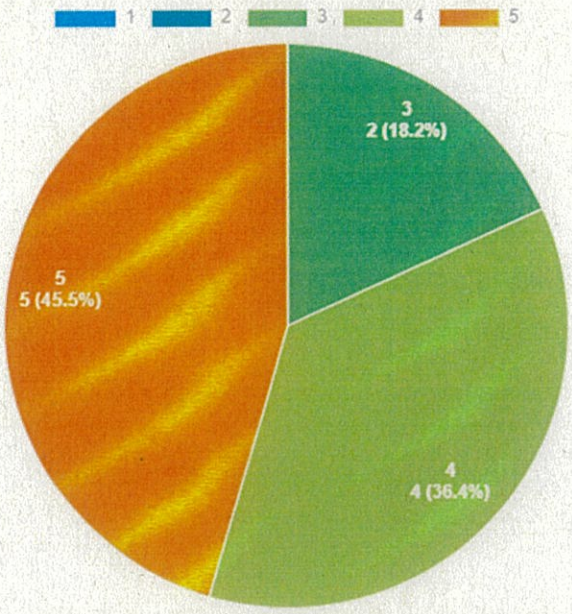
〇６年間生徒の様子を確認できることと、６年分の生徒情報を教員間で共有できるため、教育相談の面および進路指導の面で特に生徒をサポートしやすい。

〇6 年間の長いスパンでカリキュラムを繋げていける。これが卒業後の実社会（大学に進んでも）とリアルに教育できるスタイルだと思います。 実際に作っていくことと全教職員が６年間を見通したカリキュラムを意識するのが課題なので、星を５にしなかったです。

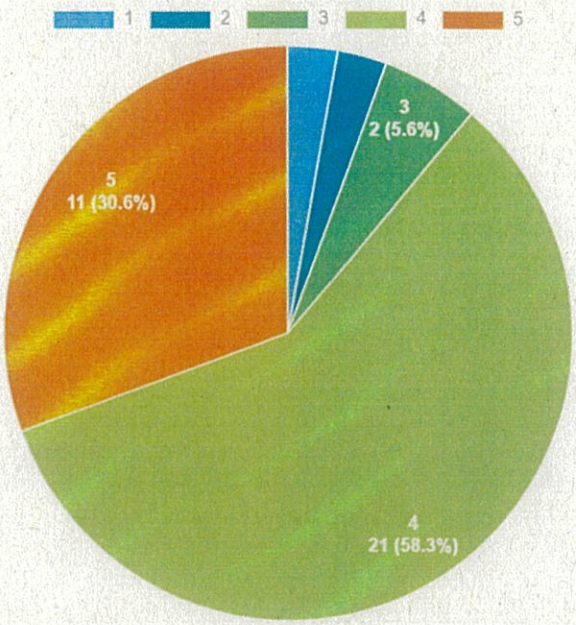
4. 在校生・保護者・先生のアンケート結果

★この学校の教育により成長を感じていますか？

５成長をすごく感じる
４成長を感じる
３どちらでもない
２成長を感じない
１成長をほとんど感じない



【保護者】



【在校生】

4. 在校生・保護者・先生のアンケート結果

※前頁のアンケートのコメント

【保護者】

○自主的に勉強や行動をしている。

○最初はできなくて苦労したが、期限を守るなど自己管理がかなりできる様になったと思う。
　その他ここには書ききれない程たくさん成長する機会を与えてもらっています。

○パソコンやプレゼンのスキル等の成長を感じている。

○6 年間と言う長い時間を共にするので友人関係や、教師と生徒の関係性も深くなり、安心感を持って学べてると思います。

【在校生】

○英語の上達はひしひしと感じる。

○プレゼンテーションスキル、英語のリスニング・リーディング・スピーキング力、ディスカッションなど多角的に物事をとらえる力は成長しました。

○この学校では、「探求型活動」を通して、ただ勉強という観念にとらわれることなく、みんなで話し合うなどの未来に向けた教育が行われています。

○ディスカッションやプレゼンテーションが多い授業スタイルなので、コミュニケーション能力が飛躍的に向上したと個人的には思っている。

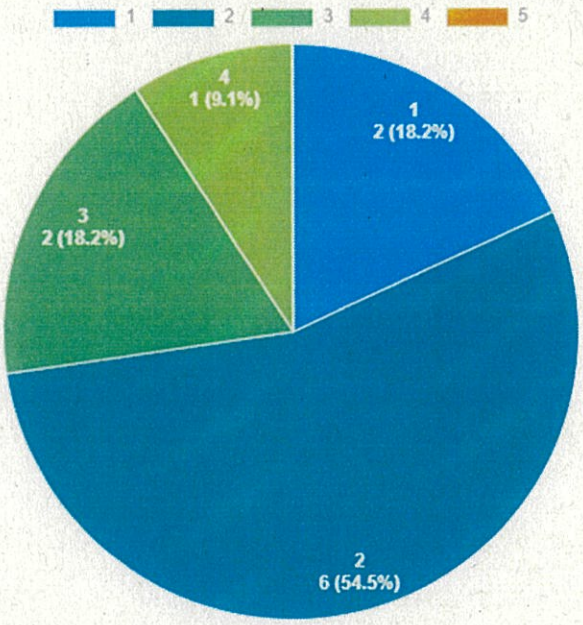
○物事を深く考えるようになった。また、自分の意見を持ちそれを他の人に伝えるスキルが身に付いたと思う。

○色々考え方が変わりました。吹っ切れることも学びました。

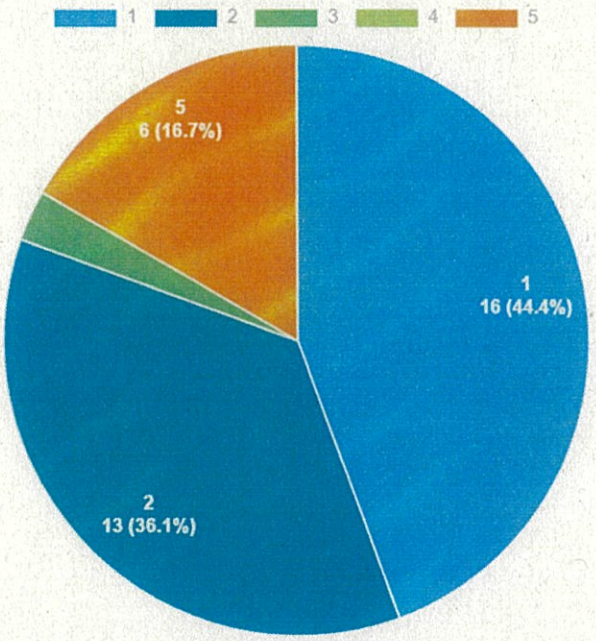
4. 在校生・保護者・先生のアンケート結果

★大学受験に対する不安はありますか？

５全く不安がない
４不安がない
３どちらでもない
２不安がある
１とても不安がある



【保護者】



【在校生】

※前頁のアンケートのコメント

【保護者】
〇一期生ということで、進学の前例がないため、不安である。

〇周りのお友達に引っ張ってもらって自主的に勉強をしようとしている様子が見られるが、学校自体が新設校である事と受験のシステムが私達の時代とはかなり変わってきているので、子どもはわかっているのかもしれないが、私はわからない事だらけの不安がある。

〇学力が客観的に把握しづらい。特徴のある評価方法のため、通常の入試に対応できるのか、わからない。

〇一期生なので結果も含め、まだ何とも言えませんが、生徒達が自主的に受験に対して考えて学習してると感じます。

【在校生】
〇先輩がいないので学校としての経験がなく、指定校推薦などが少ないことに対して不安があります。

〇現状の大学受験システムは従来の高校生のカリキュラムに沿ったものが多く、自分たちの学校はカリキュラムが特徴的であるため、大学受験に対応できるのか不安な点はある。

〇大学受験が変わるタイミングという不安はあります。

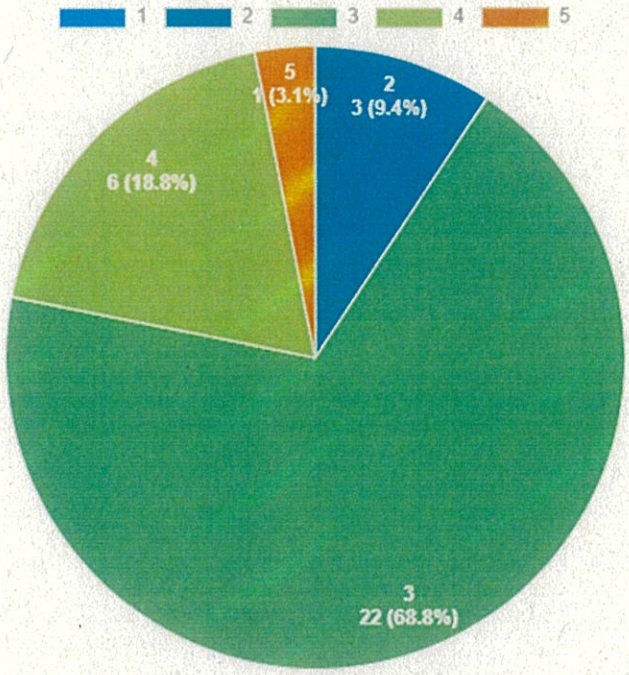
〇表現能力は身に付いたものの知識が詰め込まれていないから不安。

〇知識ベースの授業が少なすぎて大学受験までに完成させられるのかとても不安です。

〇IB 試験を設ける大学が限られている。

★この学校の中高一貫校の教育は、
大学受験に有利ですか？

5すごく有利
4有利
3どちらでもない
2不利
1すごく不利



【先生】

【先生】
〇この学校の教育活動は、大学受験をゴールとしていないということです。ただ、高校生で学ぶ内容を先取りして学習しやすいという利点はあります。

〇有利だと思います。ただ、今までの「受験対策」と異なるため、職員・生徒・保護者・地域の認識を高めないといけません。入試の内容も少しずつ変更してきてますが、それを待たずに実社会に貢献できる人材を育成しましょう。入学できた大学で将来が決まってくる考え方から見直す必要性があります。この見直しが教育現場だけではなく、社会のあらゆるところでも必要です。

〇探究的な学習に力を入れているため、総合型選抜へのつながりや、自身の興味・関心の深掘りによるキャリア教育へのつながりという点では有利に働くのではないかと思う。
一方で、現行の大学入試への対応の近道（問題演習等）とういう点で見れば、本校は基本的にそういった教育は行っていないため不利と言えるかもしれない。

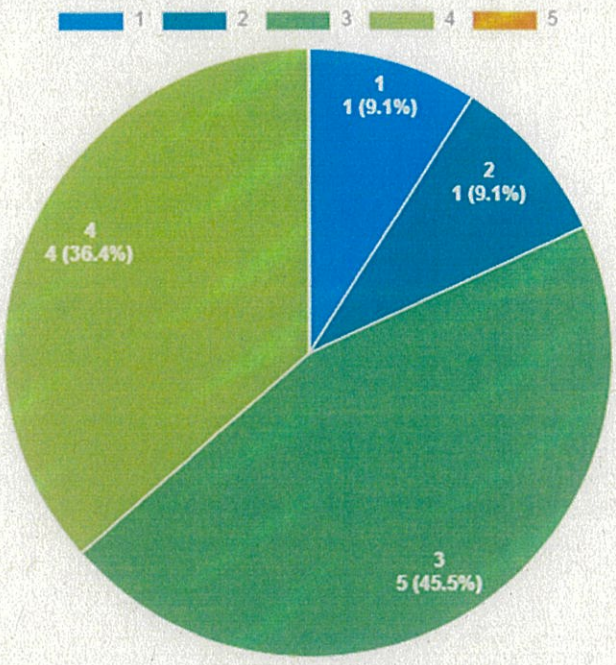
〇意欲がある生徒ならば、基礎を自分で学習し、応用を授業で学ぶので、とても有利だと思う。
一般的な生徒（学習は学校の授業のみ、課題は提出するが中身はほどほど）を例に考えるならば、有利ではない。

〇本校の IB カリキュラムは、海外大学への進学に向いています。いわゆる国内大学への受験への対策は別でしないといけないと思います。有利ではありません。

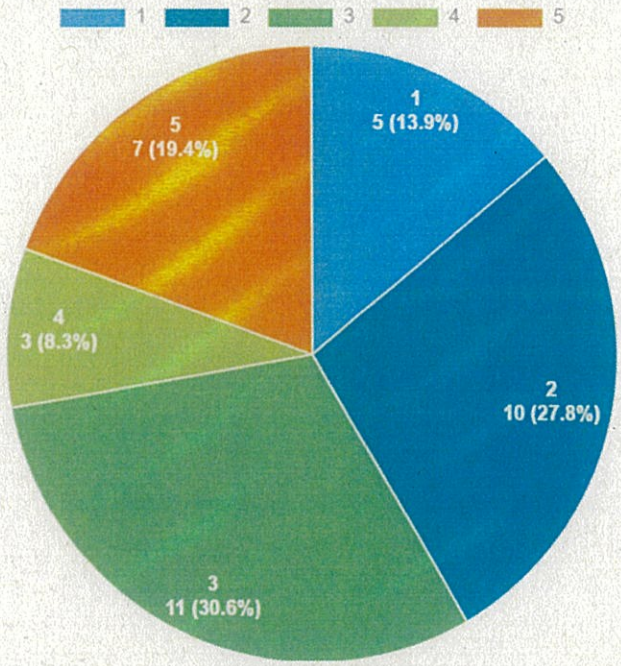
4. 在校生・保護者・先生のアンケート結果

★社会に出てからの不安はありますか？

５全く不安がない
４不安がない
３どちらでもない
２不安がある
１とても不安がある



【保護者】



【在校生】

※前頁のアンケートのコメント

【保護者】
〇学校自体が社会で生きていく事を主眼に置いて下さっているので仕事等課題に対して乗り越えていける力はついてきていると思うが、周りの人間関係が学校生活で比較的恵まれていると思うので、意地悪な人に対する耐性があまりないと感じている。その点は少し不安に思っている。

〇親なので、全く不安がないことはありませんが、良い友人に恵まれています。また、様々な体験を通して、生きる力が育まれていると思います。

【在校生】
〇今から人と協力、グループワークの力を身に着けることができるから社会に出ても活用することができる。

〇プレゼンテーションや話し合いの力を身に着けられる教育であるため、社会に出てからは活躍する場が多いと思う

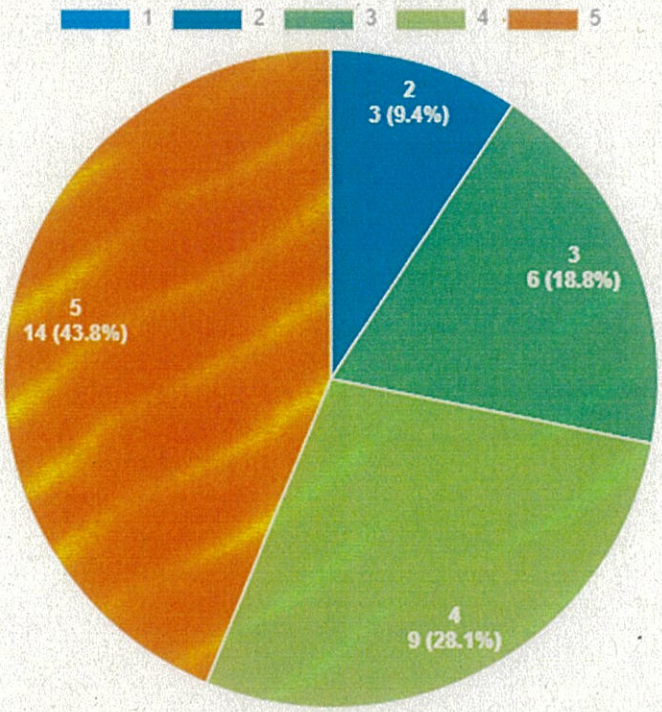
〇将来に向けて興味を見つけることができているため、ゴールが設定できているが、学校自体の実績がないことなどもあり先行きが見えない。

〇将来の夢が具体的に決まっていないため不安はあるが、実際に職に就いてからは学校で養ったスキルもあるので仕事内容さえ覚えられれば何とかなると思っているから。

〇PowerPoint や Word の使い方、ミーティングの進め方、ディスカッションを学ぶことができたため、発表に慣れることができたと思う。

★この学校の中高一貫校の教育は、
社会に出てから有利ですか？

５すごく有利
４有利
３どちらでもない
２不利
１すごく不利



【先生】

【先生】
〇探究ベースの学習は、大学合格がゴールではなく、大学入学後の研究や社会人になってからの活動に有効にはたらくように感じている。

〇本校在学中から積極的に社会と関わり、よりよい社会をつくることに参画していくことを奨励している。そのために様々な学びがあるという位置づけで各教科・科目がある。

〇人前で話をしたり、物事を深く探究したり、知識を応用したりする力が身についています。生徒がやりたい学びやプロジェクトは比較的やりやすい環境です。

〇探究学習が基盤にあり、色々な課題について自分たちで深く考え、その課題を解決していく学習スタイルであるため、社会に出てからも役立つと思います。

〇本校在学中から積極的に社会と関わり、よりよい社会をつくることに参画していくことを奨励している。そのために様々な学びがあるという位置づけで各教科・科目がある。

〇プレゼン力やコミュニケーション能力、問いを立てる力を育てるという点で有利であると思う。また、社会に目を向ける機会も非常に多いので、そういった点でも有利であると感じる。

第５章 大宮国際中等教育学校の課題と大学入試

第４章のアンケート結果から文部科学省の推奨する国際バカロレアプログラムを導入した大宮国際中等教育学校の課題が大学入試であることがわかります。

大宮国際中等教育学校では、Grit（やり抜く力）Growth（成長し続ける力）Global（世界に視野を広げる力）の３つのＧを６年間通してバランスよく身に付けることができます。また、「生涯にわたって自ら学び続ける力」や「自分の頭で考え抜き、新しい価値を生み出す力」など、国際的な視野に立って多様性を理解して研究し続ける「真の学力」を６年間の連続性の中で育んでいきます。

このように学校の教育方針は初めから大学入試をゴールにしているわけではなくグローバルな社会で活躍できる人材を育成するための教育を行っているため、現在の大学入試では不利だと学校内でも感じる人が多いようです。

【IB ディプロマと大学入試の相互関係】

実際には IB ディプロマは世界中で認められており、特にアメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリアの大学では、IB ディプロマプログラム修了者を優遇します。これらの国では、IB ディプロマの成績に基づいて大学の学部に直接入学することができます。例えば、アメリカの一部大学では、IB ディプロマで特定の成績を得ると、大学の初年度の単位として認定される場合があります。

IB ディプロマを持つ生徒は、世界各国の大学に進学するチャンスがあります。例えば、英国のオックスフォード大学やケンブリッジ大学、米国のハーバード大学やスタンフォード大学など、世界トップクラスの大学も IB ディプロマを高く評価しています。

日本では、慶應義塾大学、早稲田大学、上智大学など多くの私立大学が IB ディプロマに基づく特別入試を実施しています。これらの大学では、IB ディプロマの成績を元に入学資格を判断し、一般入試とは異なる基準で学生を受け入れます。

日本国内でも、IB ディプロマを取得した生徒は、英語能力や国際的な教養を評価され、国際関係や外国語学部などの学部への進学が有利になる傾向にあります。また、国内の大学でも IB ディプロマに基づく奨学金制度を設けている場合があります。

⑮ 日本のIB履修生の成績送付先大学（2015年-2019年）

IB スコアが入学審査の対象となり出願要項に指定されている場合には、生徒は大学出願の際にInternational Baccalaureate Information System (IBIS)を通して各大学に最終成績の通知を行う。(大学に成績を送付後、実際には出願しない場合もある)
2015-2019 日本のIB校(インターナショナルスクール含)から日本を含む世界の大学への成績送付先(10通以上の大学のみ抽出)

	国	大学等名	送付数
1	イギリス	Universities and Colleges Admissions Service (UCAS)*	350
2	日本	上智大学	318
3	日本	早稲田大学	244
4	カナダ	The University of British Columbia	212
5	日本	国際基督教大学	196
6	カナダ	University of Toronto	121
7	日本	慶應義塾大学	97
8	日本	岡山大学	91
9	オーストラリア	The University of Melbourne	84
10	日本	法政大学	59
11	カナダ	McGill Universit	58
12	オーストラリア	The University of Sydney	54
12	オーストラリア	The University of Queensland	54
14	アメリカ	Northeastern University	48
15	オーストラリア	Monash University	46
16	日本	慶應義塾大学 湘南藤沢キャンパス	43
16	シンガポール	National University of Singapore	43
16	アメリカ	New York University	43
19	日本	大阪大学	41
20	オーストラリア	The Australian National University	40
21	オーストラリア	Universities Admissions Centre (UAC: NSW & ACT)*	39
22	日本	Temple University Japan Campus	38
23	香港	The Hong Kong university of Science and Technology	36
24	日本	鹿児島大学	35
25	日本	立命館大学	32
25	アメリカ	University of Washington – Seattle	32
27	日本	北海道大学	31
28	イギリス	University College London	30
28	アメリカ	University of California – Berkeley	30
30	イギリス	King's College London	29
30	香港	The University of Hong Kong	29
32	アメリカ	Boston University	28
33	オーストラリア	The University of New South Wales	27
34	日本	筑波大学	25
35	オランダ	University of Amsterdam	24
36	イギリス	Imperial College London	23
36	日本	名古屋大学	23
36	日本	東京大学	23
36	オーストラリア	Victorian Tertiary Admissions Centre*	23
36	日本	横浜市立大学	23
41	日本	広島大学	22
41	アメリカ	Knox College	22
43	日本	同志社大学	20
43	日本	明治大学	20
43	アメリカ	University of California – San Diego	20
43	カナダ	University of Waterloo	20
47	シンガポール	Nanyang Technological University	19
47	カナダ	University of Alberta	19
47	イギリス	University of St Andrews	19
50	アメリカ	Purdue University – West Lafayette	18
50	オーストラリア	Queensland University of Technology	18
50	イギリス	The University of Edinburgh	18
53	日本	立命館アジア太平洋大学	17
54	アメリカ	University of Southern California	16
55	韓国	Seoul National University	15
55	カナダ	Simon Fraser University	15
55	アメリカ	University of California – Los Angeles	15
58	香港	The Chinese University of Hong Kong	14
58	オーストラリア	The University of Adelaide	14
58	イギリス	The University of Manchester	14
58	イギリス	University of Warwick	14
62	日本	国際教養大学	13
62	アメリカ	Brown University	13
62	アメリカ	Chapman University	13
62	オランダ	Leiden University	13
62	アメリカ	University of California – Davis	13
62	イギリス	University of the Arts London	13
62	カナダ	York University	13
69	アメリカ	Cornell University	12
69	UAE	New York University Abu Dhabi	12
69	アメリカ	University of California – Santa Cruz	12
69	オランダ	University of Groningen	12
69	カナダ	University of Victoria	12
74	オーストラリア	Macquarie University	11
74	アメリカ	Middlebury College	11
74	オーストラリア	South Australian Tertiary Admissions Centre*	11
74	ドイツ	Uni-Assist*	11
74	オランダ	Maastricht University	11
74	アメリカ	University of Illinois Urbana-Champaign	11
80	韓国	Korea University	10
80	イギリス	London School of Economics and Political Science	10
80	オーストラリア	Queensland Tertiary Admissions Centre*	10
80	アメリカ	Savannah College of Art and Design	10
80	アメリカ	Stanford University	10
80	日本	東京大学 駒場キャンパス	10
80	イギリス	University of Bristol	10
80	イギリス	University of Exeter	10
80	アメリカ	University of Oregon	10
80	アメリカ	University of Pennsylvania	10
80	オーストラリア	The University of Western Australia	10
80	アメリカ	Wesleyan University	10
80	アメリカ	Yale University	10

*大学への出願を仲介する機関。各機関を通じて出願する場合と大学に直接出願する場合がある。

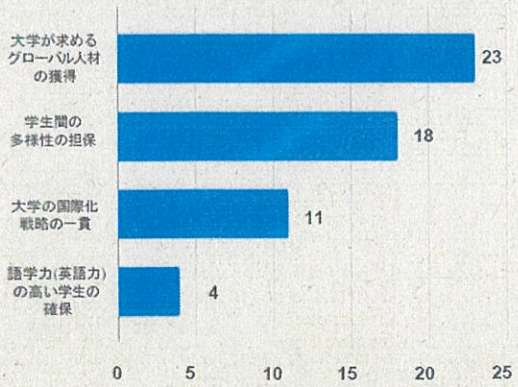
<国別の合計>

国	大学等数	送付数
日本	22	1421
イギリス	12	540
カナダ	8	470
オーストラリア	14	441
アメリカ	23	417
香港	3	79
シンガポール	2	62
オランダ	4	60
韓国	2	25
UAE	1	12
ドイツ	1	11

⑭-1 IBを活用した大学入学者選抜に関するアンケート調査（2021年度）

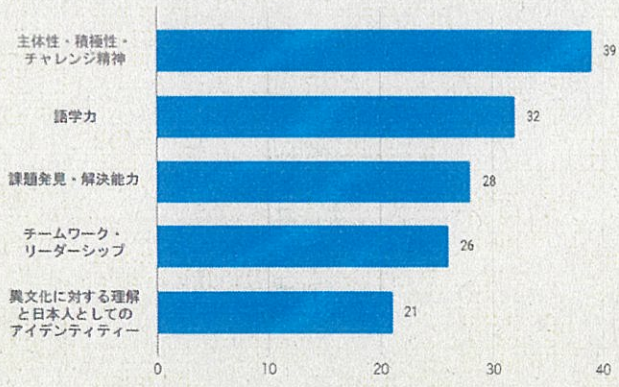
pdf)

IBを活用した入試を導入した目的



（自由記述、複数回答、45校中）

IBを入試に活用する大学が期待するIB生の資質・能力



（選択式、複数回答、本設問に回答のあった大学43校中）

【調査対象】IBを活用した入学者選抜を実施している日本国内の大学68校
【有効回答数】45校

【調査実施主体】文部科学省IB教育推進コンソーシアム事務局

令和３年度 国際バカロレア（IB）を活用した大学進学に関する調査（文部科学省）

【IB（国際バカロレア）生向けの大学入試】

前頁のアンケート調査は、IB（国際バカロレア）生向けの大学入試を行う大学の調査資料です。大学がどんな目的で導入したのか？またどんな資質・能力に期待しているのかがわかります。

⑫ＩＢを活用した国内大学入試（2022年度調査）

全学部実施（40大学）		一部学部実施（37大学）	
【国立】	武蔵野学院大学	【国立】	慶應義塾大学
筑波大学	工学院大学	北海道大学	順天堂大学
お茶の水女子大学	国際基督教大学	東北大学	上智大学
東京医科歯科大学	芝浦工業大学	秋田大学	創価大学
東京外国語大学	玉川大学	群馬大学	中央大学
東京学芸大学	多摩美術大学	東京藝術大学	東京理科大学
金沢大学	東京都市大学	東京大学	法政大学
名古屋大学	東洋大学	京都大学	武蔵野大学
京都工芸繊維大学	日本獣医生命科学大学	大阪大学	明治学院大学
香川大学	日本体育大学	岡山大学	明治大学
九州工業大学	ビジネス・ブレークスルー大学	広島大学	立教大学
鹿児島大学	武蔵野美術大学	九州大学	早稲田大学
琉球大学	松本歯科大学	長崎大学	愛知医科大学
	中京大学		立命館大学
【公立】	京都外国語大学	【公立】	関西医科大学
国際教養大学	同志社大学	東京都立大学	関西大学
会津大学	関西学院大学	都留文科大学	近畿大学
横浜市立大学	神戸女学院大学	大阪公立大学	広島修道大学
兵庫県立大学	倉敷芸術科学大学		
叡啓大学	西南学院大学	【私立】	
	立命館アジア太平洋大学	国際医療福祉大学	計77大学
【私立】		東京国際大学	
東北福祉大学		明海大学	
日本工業大学		青山学院大学	

【注】・日本の学校の卒業生を対象としているものを記載（帰国生や留学生に対象を限定しているものを除く）
・下線はIB資格取得者・取得予定者のみを対象とした入試を実施している大学である。
・各大学へのアンケートに基づき文部科学省ＩＢ教育推進コンソーシアム事務局にて作成したもので、必ずしも全ての情報を網羅しているわけではありません。（調査：２０２２年１２月時点）

※文部科学省ＩＢ教育推進コンソーシアム事務局調べ

現在、IB(国際バカロレア)入試を実施している大学は約 70 校あります。このような入試を行っている学校の多くが IB 生を評価している。
https://ibconsortium.mext.go.jp/ib-japan/admissions-policy/

一方、IB（国際バカロレア）ディプロマを持つ生徒のための特別な大学入学者選抜を行っていない大学が導入しない理由として下記のようなものが考えられます。

（リソースの制限）

一部の大学では、特定の入試制度を運営するための十分なリソースがない場合があります。これには、専門的な知識を持つスタッフの不足や財政的な制約が含まれます。

（均一な入学基準の維持）
一部の大学は、全ての応募者に対して均一な入学基準を適用することを重視しています。これにより、異なる教育背景を持つ応募者間での公平性を保つことを目指しています。

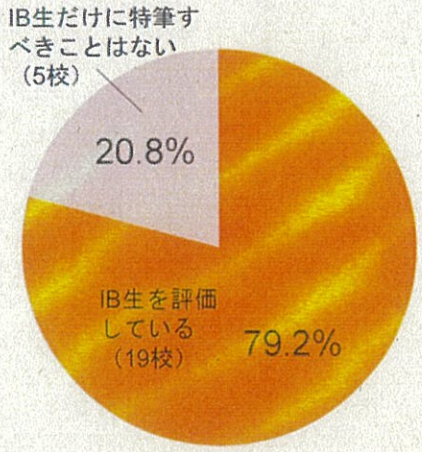
（認知度と普及率の問題）
特定の地域や国では、IB プログラムの認知度が低いため、大学が IB 特有の入学プロセスを設ける必要性を感じていない可能性があります。

（入学基準の複雑化の回避）
大学によっては、入学プロセスをできるだけシンプルに保ちたいと考えており、特定のプログラムに基づく特別な選抜基準を設けることを避ける場合があります。

（IB カリキュラムの評価への不慣れ）
一部の大学は、IB カリキュラムの特異性や評価基準に精通していない可能性があります。そのため、IB ディプロマの価値や成績を正確に評価することが難しい場合があります。

（地域的な教育方針の違い）
地域によっては、国内の教育システムやカリキュラムに重点を置く教育方針が採られている場合があり、国際的なプログラムに対する理解が限られている可能性があります。

入学後のIB生に対する大学側の評価



母集団：回答42大学

・評価について回答のあった大学のうち約8割がIB生を高く評価している。
・評価しているポイントは、語学力・学力などの認知能力から主体性、異文化理解、課題発見・解決、リーダーシップなどの非認知能力まで多岐にわたる。

【総合型選抜（ＡＯ入試）】

IB（国際バカロレア）生が対応しやすい入試として注目されているのが、総合型選抜（ＡＯ入試）です。詳細な書類審査と時間をかけた丁寧な面接等 を組み合わせることによって、入学志願者の能力・適性や学習に対する意欲、目的意識等を総合的に評価・判定する入試方法です。

①入学志願者本人が記載する活動報告書、大学入学希望理由書及び学修計画書等を積極的に活用。

②入学志願者の能力・意欲・適性等を多面的・ 総合的に評価・判定する。なお、高度な専門 知識等が必要な職業分野に求められる人材養成を目的とする学部・学科等における選抜では、当該職業分野を目指すことに関する入学志願者の意欲・適性等を特に重視した評価・ 判定に留意。

③「見直しに係る予告」で示した評価方法等 又は大学入学共通テストのうち少なくともいずれか一つを必ず活用。

文部科学省の資料より

総合型選抜、学校推薦型選抜、一般選抜の区分

○総合型選抜（ＡＯ入試）	○学校推薦型選抜（推薦入試）	○一般選抜（一般入試）
（概要） 詳細な書類審査と時間をかけた丁寧な面接等を組み合わせることによって、入学志願者の能力・適性や学習に対する意欲、目的意識等を総合的に評価・判定する入試方法。 ①入学志願者本人が記載する活動報告書、大学入学希望理由書及び学修計画書等を積極的に活用。 ②入学志願者の能力・意欲・適性等を多面的・総合的に評価・判定する。なお、高度な専門知識等が必要な職業分野に求められる人材養成を目的とする学部・学科等における選抜では、当該職業分野を目指すことに関する入学志願者の意欲・適性等を特に重視した評価・判定に留意。 ③「見直しに係る予告」で示した評価方法等*又は大学入学共通テストのうち少なくともいずれか一つを必ず活用。 ＊例えば、小論文等、プレゼンテーション、口頭試問、実技、各教科・科目に係るテスト、資格・検定試験の成績等。 **（時期）** 出願期間は９月1日～ 結果発表は11月1日～ 学力検査を課す場合の試験期日は 2月1日～3月25日	**（概要）** 出身高等学校長の推薦に基づき、調査書を主な資料として評価・判定する入試方法。 この方法による場合は、以下の点に留意する。 ①「見直しに係る予告」で示した評価方法等*又は大学入学共通テストのうち少なくともいずれか一つを必ず活用。 ②推薦書の中に、入学志願者本人の学習歴や活動歴を踏まえた学力の３要素に関する評価や、生徒の努力を要する点などその後の指導において特に配慮を要するものがあればその内容について記載を求める。 ③募集人員は、学部等募集単位ごとの入学定員の５割を超えない範囲で定める。 ＊例えば、小論文等、プレゼンテーション、口頭試問、実技、各教科・科目に係るテスト、資格・検定試験の成績等。 **（時期）** 出願期間は11月1日～ 結果発表は12月1日～ （一般選抜の試験期日の10日前まで） 学力検査を課す場合の試験期日は 2月1日～3月25日	**（概要）** 調査書の内容、学力検査、小論文、入学志願者本人が記載する資料の他、エッセイ、面接、ディベート、集団討論、プレゼンテーション、各種大会や顕彰等の記録、総合的な学習の時間などにおける生徒の探究的な学習の成果等に関する資料やその面談等により、入学志願者の能力・意欲・適性等を多面的・総合的に評価・判定する入試方法。 **（時期）** 学力検査を課す場合の試験期日は2月1日～3月25日 結果発表は～3月31日まで 11

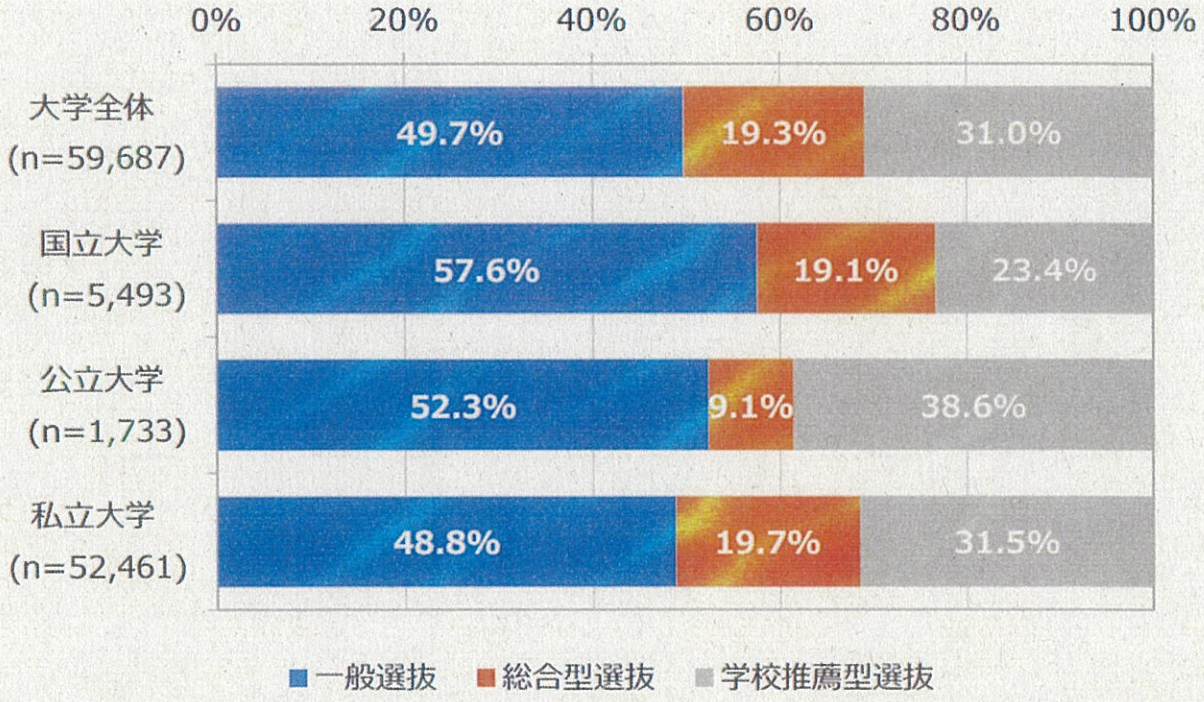
（国立大学の約８割が総合型選抜を実施）

文科省が 22 年 10 月に発表した調査結果によると、23 年度入試で総合型選抜を実施する国公立大学は 104 校で、前年度に引き続き 100 校を超えました。

国立大学では、岡山大学が一般選抜の後期日程を廃止し、文学部、法学部、理学部などの入試に総合型選抜を新規導入したほか、静岡大学、香川大学、島根大学などが総合型選抜を行う学部を追加しました。現在では、国立大学の約８割が一部の学部、またはすべての学部で、総合型選抜を実施しています。

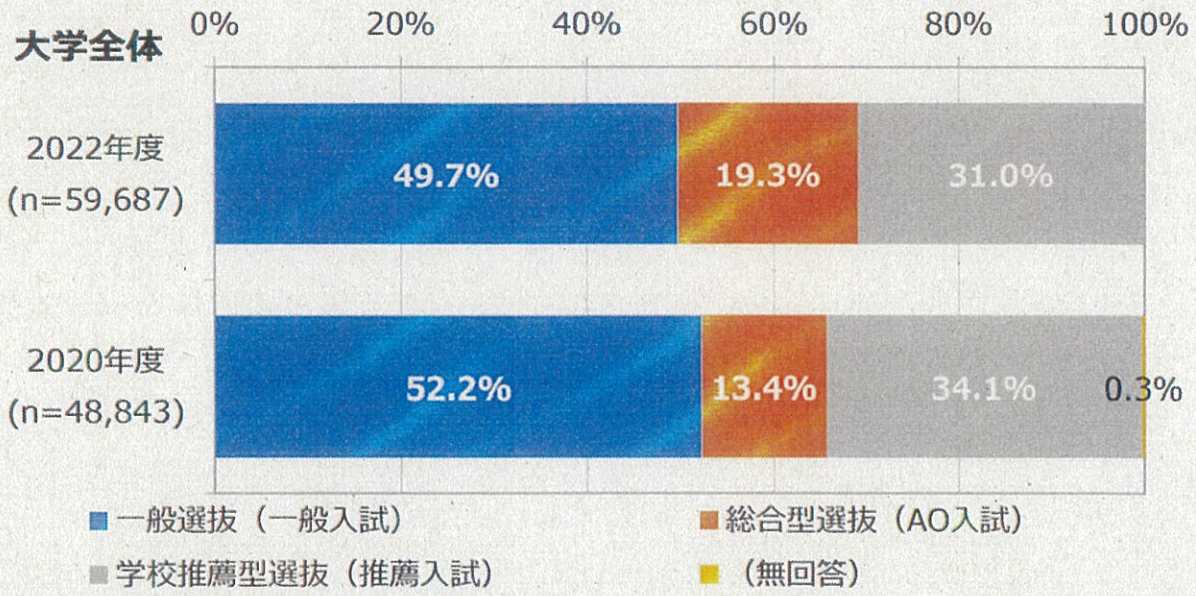
「大学入学者選抜の実態の把握及び分析等に関する調査研究」報告書（令和５年２月）

図表 3-2　選抜方法（国公私・選抜区分数別）



「大学入学者選抜の実態の把握及び分析等に関する調査研究」報告書（令和５年２月）

図表 3-3　【前回調査との比較】選抜方法（大学全体・選抜区分別）



図表3-3【前回調査との比較】選抜方法（大学全体・前場着く分別）を見ると、２０２２年度と２０２０年度の総合型選抜（AO 入試）の割合を比較することができます。

２０２０年度は１３．４％だったのに対して２０２０年度は１９．３％と大幅に増えています。知識中心の一般選抜は、AI（人工知能）の進化と大学改革一貫で今後さらに縮小し、総合型選抜（AO 入試）が拡大していくことが考えられます。

現在、大宮国際中等教育学校のような IB（国際バカロレア）を導入する学校にとっては、まだまだ不利な状況がありますが、時代の変化とともに日本の大学でも IB（国際バカロレア）生の評価が高まり、より有利な時代が来ることを確信しております。

これから開校して初めての大学入試を控える大宮国際中等教育学校の校長先生の話しでは、「１期生はどんな大学を考えたらいいのか、進路についても一から切り拓いていく！」とのことです。

以上、今回の調査報告書を通じて、神戸市の教育の発展の一助になれることを願います。